

狂言

狂言人語

共同社

歌村彦四郎

35年を回顧して

小紙「狂言」も発刊以来五年目を迎え、毒にも薬にもならぬ勝手気ままなことを記して来ましたが、それでもいくらか能楽界のために尽したことの、自負しております。

一昨年は後半台風にいたためられて催しも延期やら中止になりましたが、にも拘らず能は九十二番狂言は四十五番をかぞへております。

昨三十五年

は順調にもりかへして年間能百十二番狂言六十八番を演じておりま

す、うち珍らしいものは「木曾、国栖、大瓶狸々、青衣女人、住吉詣」等、狂言では「樋の酒、金岡、祢宜山伏」大ものに花子、釣狐がありました。うち舟弁慶が六回を最高に融、安達原が四回宛出ております。

昭和36年1月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5/2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社地上社 電話1190

の創立十周年の大会、田鍋惣太郎氏が舞台六十年、五流道成寺の完了を記念して田鍋氏自身が道成寺を舞ふ大乱能さすがに囃子方の御大だけに乱拍子など一糸乱れず堂々たるもので、小鼓の観世喜之氏との取組はまことに結構でした。いつも乍らの壮健さにはホトホト感じ入りました。

今年もまた昨年同様賑やかなで繁昌することでしょう。
名古屋和泉家の発足
狂言和泉流宗家一和泉保之氏を迎え



春 頌

昭和三十六年元旦

名古屋狂言

共同社

て、徳川義親氏をはじめ地名の士の後援を得て、一般同好の方々と呼びかけ会員組織として年一回の狂言公演会を開き、他に狂言小舞、小うたい、などの教室を設けその普及を計る構想であります。

それにつき来る二月中旬には、その前夜祭とも云うべき狂言小舞小謡の公演会を開き皆さまを御招待する予定であります。この郷土芸術の保護育成を御助力下され振つて御加入をお願い致します。

します。(趣意書と規程定は別にあります)

謹賀新年

和泉保之

名古屋共同社は昨年は創立七十周年を迎え、その公演の外朝日狂言会等を企画発表大いに和泉流発祥の地にふさわしい足跡を残しました。

近年特に能、狂言を採り入れた新形式の企画が成され、時代に呼応する試みのある中で、全く恵まれた土地で此伝統ある芸術がすくすくとのびていく事は将来にとつて誠に意義深いものがあります。

近年の演劇全般に云へることですが一と昔前から比べると非常にスピード化されてきた事を思います。

特に狂言だけを考へても随分と近代的になつてきて素朴な味と云うか、いわゆる狂言のもつ狂言らしい味が薄味になつていく様に感じ、特に将来これを継承していく若い世代の人の考へに依つて

ものになつていくのではないかと……。発生当時から現在迄、様々の変遷はあつたと思ひますが、又これからの事は観て頂く

方に依つても、その代々の方が違つてくるのではないかと。狂言の持つ味をいつまでも失われな

いよう観者の方の温かい目で育つていく事を特に名古屋能楽界、強いては狂言界のために望んで止みません。

(筆者は狂言和泉流宗家)

一月の催能

一、八名古屋学生能楽連盟

能と狂言の会

舟弁慶 伊藤嘉奈子(相山大)

葵の上 内藤又三郎

蚊相撲 井上松次郎

茶壺 (名大)

一、一五 清韻会四十周年 (法政大)

安宅 赤間 鎮雄

道成寺 大槻 十三

武悪 殿島 修二

二、二二 宝生会初会 河村 丘造

西王母 宝生 九郎

盛久 堀 富次

夷毘沙門 宝生 九郎

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

河村 丘造

狂言の解説

蚊相撲(かすもう) 相撲ものもいろいろありますが、これは又蚊の精を人間にして、大名と相撲をとらせる狂言の妙味であります。

骨 皮(ほねかわ) 寺を譲られた小坊主が客あしらいを大切にしようにと師匠に云われ、馬を借りて来た人に傘の断りをを用い師匠を骨と皮とバラバラにするおかしさ。

茶壺(ちやつぼ) 田舎ものと京のならずもの、争いに所目代が仲に入り「論ずるものは中からとれ」とあつて、漁夫の利をとつてしまします。

武悪(ぶあく) 召使の武悪(なまえ)の度かさなる不奉公に、主の気嫌を損じました。太郎冠者は武悪を成敗するよう命ぜられ、討手に向つたが朋輩のよしみ哀れを感じ、遂に命を助けます。主は心を慰めに東山へ参る途中武悪と出会いま

すが、太郎冠者の機転で武愚を幽霊に仕立て真土の有様など語らせませす。狂言のうちでも歌舞伎に近い劇的要素を多分に含む見ごたえのある狂言です。

夷毘沙門（あびすびしゃもん）
これはまた夷と毘沙門が美人の一人娘のところへ、舞入りの競争をするとう、とんでもないこと扱つたもの結局二人ともに「この所にこそ納まりけれ」となりますが、その後のいきさつは、どうなることやら……。

狂言初心

野村広二

明けましておめでとうございます。またあたらしい年がやつてきました。正月は寒くても、お天気でも、また雪がふつても、よいものです。正月は寒いときに迎えるのですが、くれゆく夕方の空の眺めは好ましい眺めの一つです。三日月が出るときもよいものです。何か能のもつ味に通つております。この頃、中米の視察からかえられた方のカラスライドでみた、雲上はるか高いところであつた新月の一枚はまさに幽玄の現代版でした。正月の花も、梅と菊と椿と。何かすがすがしさを祝つてくれます。椿といえ、昨年冬が来たかた、蕾のふくらみも早かつたようです。それに、熱田さんの参道わきに、大きな木で、あかい一重の花をつけたのがなかなか見事です。今年はどうでしょう。正月の楽しみです。

名古屋能楽界もあたらしい年を迎え、昨年にもまして活発な動きをみせることでしょう。昨年は、狂言の会が実にたびたびひらかれ、東西の狂言師に、新作をまじえて、大いに楽しめられた、最近では、狂言の方が能よりも、

舞台の安定感を与えてくれます。これは大きな問題だともいいます。次に佐藤秀雄氏が「釣狐」を演じたことも話題の一つ、「鬼瓦」（河村丘造）、「萩大名」（佐藤卯三郎）も秀逸でした。能では、六郎、本田秀男、鉄之丞三人の活躍がとてすばらしかつたとおもいます。それから九郎、乾三、実、万三郎、英雄、巖、元照の諸氏です。そして、いい能であらうべきに、ちよつとしたことからさうい切れない未完の傑作もありました。それと小鼓方田鍋惣太郎氏の乱能「道成寺」のシテ、婦人能、青年楽師の研究心、これは、あせらず、大きな巾を身につけるには苦心のいることだともいいますが、修業の道は楽なものではありません。こうした豊富な話題があつたわけです。

では今年の夢はどうでしょう。今年は何か大きなことがおこりそうな気がします。しかし足はいつも地についておらねばならぬとおもいます。狂言や能のあり方、普及のしかた、見方、こつたことでも、みんなどうんかと考えてみたいとおもいます。毎年いわれることながら、なかなかつかしいこととで、はかどらないのがこれまでのあり様でした。世阿弥の初心三戒もわすれてはならないとおもいます。あふれるばかりの現代感覚ももつてくださるばおねがいします。真実、狂言や能の、広大な美、おかしさえの眼をひらくことはむづかしいこととす。狂言と能のよきにとりつかれた方々の虚心な協力がのぞまれる次第です。

今年も、舞台がまづ世界である人たちから、どんな狂言や能がみせてもらえるのか、どんな太郎冠者が登場するか、実に楽しみなこととすす希望に

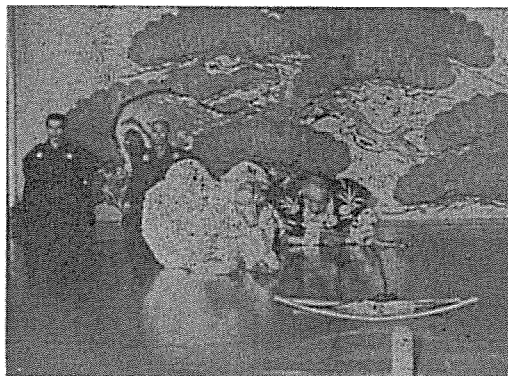
胸をふくらませて、能楽殿通いをいたしましよ。 (筆者はNHK考査室)

能と狂言の絵の会

仙田雪山子画伯の能と狂言の絵の会はみさまの多大な御賛助を得まして厚く御礼を申し上げます。

ついてはいよ／＼軌道にのりましてので改めて御申込みを受けることにいたしました。重ねて御援助の程をお願い致します。御申越次第御定書お送りいたします

歌村彦四郎
千種区内山町三ノ四一
電話④四〇四六



釣狐 佐藤秀雄 河村丘造 (共同社70年記念能)

二月の予告

- 二、二 たなびき会囃子会
- 二、二 名古屋観世会初回
- 二、二 観世 元昭
- 二、二 井上松次郎
- 二、二 杜若 観世 元正
- 二、二 小袖曾我 武田太加志
- 二、二 鶴 佐藤 秀雄
- 二、二 壺泉会 佐藤卯三郎 河村 丘造

和泉流狂言記 (門水翁遺稿)

昨秋共同社先人、狂言とお洒落の伊勢門水翁の遺稿「御洒落伝」が刊行されました。そのうちの狂言記を刊行会の承認を得て伝載いたします。

和泉流狂言記 (元文のまゝ) (1)

和泉流の狂言は名古屋が宗家であり、池内翁の能楽盛衰記や名古屋市史にも大略記してあるが、古老から聞いていた咄しを少々ばかり取り交せてお取次をしておかう。

能の狂言には大蔵流、鶯流、和泉流の三派がある。その内和泉流が最も名古屋に縁故が深い。源は、江州坂本に岳楽軒と云う隠遁者で、神道歌道を修め、殊に狂言に熟達した人があつた。その甥に佐々木源五郎(和泉、元幸)と云う者があつて、狂言を岳楽軒より相伝を受けて上手との評判で、中年には京都に住し、禁裏御用を拝命したことが度々ある。

山脇姓を名乗るに至つたのは、五代目元宜の時からで、元宜は幼名を源助と云ひ、寛永十八年に禁裏御能の節花子を勤め願る上手とあつて和泉守に任ぜらる。和泉流を名乗り出したのは、多分この時からであらう。慶長十九年、源敬公十八歳の時、尾州へ召抱へられ切米百石扶持八口を給はる。依てこの元宜が和泉流名古屋での初代といふ事になる。

二代目を五郎左衛門、三代目を元信と云つた。元禄六年隠退して元知と云うが四代目を相続し、時の藩主光友侯より空海作延命冠者の面を拝領した。元知は享保十六年に卒し、その次男の元喬が五代目を嗣いだ。六代目を元貞といひ、七代目は元業といひ、この人、文化十三年禁裏にて柎子と酒講式

を勤む。

和泉流は古くから禁中の御用を勤めて居たが、尾州お抱へになつてから禁中へも、また江戸城へも出勤していた。それで江戸城へも出勤した。一時大蔵流の弟子という名目で勤めたものである。さるかはり、大蔵が禁中に出勤する時には、反対に和泉の弟子の名目で勤めるといふ例があつたという。因みに驚流は親世より出て来るが、和泉、大蔵はともに金春流より出て来る。

八代目は七代目の実子で元賀といひ、廃藩置県となり、明治九年に卒す。その子元清九代目を継ぎ明治十八年東京に移住、明治四十四年卒す。十代目を継いだ元照は年三十にして大正五年に卒した。

これ以後、家元を欠き、現今では同流の野村又三郎、藤江又喜、野村万六郎等が芸事を管している。(この項・昭和二年四月号「紙魚」参照)

名古屋には、和泉流家元・山脇家の外に、狂言の師家として尾州家へお抱への役者に山脇得平、野村又三郎、早川幸八の三家があつた。慶長十九年、和泉守が尾州家へお抱へになる時、狂言は一人や二人では出来ぬものであつて、京都在住の門弟中より山脇正五郎、同権三郎、渡辺甚三郎、佐々藤左衛門、筒井市三郎の五人を引俱してきただので、それぞれお扶持人のお役者となつたが、それがどふした都合か、五人とも一時にお抱へ解きになつた。それから数年後、前記の五人を又ぞろ召抱へたいとお沙汰がでたが、四名はすでに諸藩へ抱へられて、佐々藤左衛門一人だけ在京していたので、幸いとこれと呼び戻して更にお召抱へとなつた。これが則ち山脇得平の家系で、二

代目を継いだ。三代目が藤左衛門、四代目も藤左衛門、五代目藤蔵、六代目藤左衛門、七代目治兵衛、八代目藤左衛門、この人に子が無いので、内藤九郎の弟子の鬼頭得平という養子にとつて九代目を継がした。

この得平は明治十一年に卒した。門人に角淵新太郎といふのがある。狂言が功者なため九代目得平歿後は芸事を相続した。後年、家元の直門となつて一子相伝の狸腹鼓まで勤め、今なほ壯健で八十歳を越えている。

野村又三郎は、元京都の人で、和泉の門家であつて、正徳元年七月四日に近衛家の召によつて病中を推して出勤し、宗論のシテを勤め、「一念弥陀仏無量罪」と言い終るや否や絶命したといふ奇特な老人、これが初代で、その子の信之が二世又三郎を継ぎ、三代目又三郎が正徳三年に尾州侯に召出され、切米二十五石を賜ふ。それより八代まで無事太平に芸事を相続し、九代目又三郎信茂より大阪に転住し、明治四十年に卒した。その子の又三郎信英が十代目を相続し、現今は東京に住して宗家の芸事を管した。

九代目又三郎の門弟に名古屋では河村健三郎がある。現今、当地の狂言界を取締つて多くの子弟を教授してをる。

早川家は三代目和泉の門家で、忠三郎と云う。芸事の堪能なるによつて、元禄三年より尾州家へ召出され、五十年勤続し延享三年に卒した。これが初代で、二代目を幸八といひ、安永六年禁中にて狂言数番を勤めた。この人、五十二年勤続、寛政八年に卒す。

その子、芳八が三代目となり六十四年勤続して文政九年卒。四代目を幸

八といひ、總て早川家の長命筋にて、この人も五十六年間を勤め、明治十年七月に七十五歳で亡くなつた。その弟子に井上菊次郎といふがある。明治四十年に家元から早川家の芸事を託された近代の名手で、晩年には東京に飯寓して再度行啓能に出勤の光栄をさへ頂いてをる。この人、七十五歳で七年前にこの世を去つた。

一説には、早川家の初代忠三郎は、三代目山脇和泉家の下男であつて、見る見真似に狂言を自得し、それが意外に上手であつたため、終に召出されたといはれてをる。

そこで、名古屋の狂言といふは、尾州侯がお抱役者で禁裏の御用をも勤むる和泉流の家元山脇和泉守の外に、斯道の師家としては前にも記した山脇、野村、早川、内藤など、それぞれ稽古舞台を構へ、数多の弟子を取立てて居たも、多くは、良家の子弟達ばかりで、町人平民の弟子は至つて僅少であつたらしいが、とにかく昭和の今日、名古屋に見る狂言は皆この師家の末流の残党が合同して共同社というを結び、多くの装束を共有して今に至つてをるのである。

なほ、数ならぬ自分は四代目早川幸八の末弟で、明治十四年六月十二日、上園町一丁目の古春宅で催された能組に出演し、鏡男を勤めたのを覚えて居るが、その時は水野代次郎という幼名で出て居る。

古い番組をみるとハツキリするが、愛知県博物館に能舞台ができて、その舞台開きがあつたのが明治二十七年六月十日で、十一日が休み、十二日に二日目を開き、その日に伊勢門水の名で鍋八捲を勤め、三日目の十四日には翁を山脇元清らと勤めた。(つづく)

賀正

ふごや

河文

電話代表 一三八一番

トヨダビル

地下二階

電話 〇〇一六八番 〇〇二五八番

地下一階

とてな

船津屋

電話桑名代表一八八〇番

新城富永神社奉献能について

河村 丘造

新城市富永神社御祭礼奉献能は二百年
 来毎年十月八日同神社能楽殿に於て催
 されて居るが、本年は前日降雨激しく
 一寸心配されたが幸当日は快晴に恵ま
 れ一同ホッと安心させられた。毎年の
 事乍ら番組面では午後二時始めとなつ
 ているのに二時が三時になり、本年の
 如き初まったのは四時過ぎとなつて二
 時間余も遅れて始まつた始末である。
 従つて終演が午後十一時過ぎとなつて
 観客席の如きも終り頃はパラパラと数
 える程であつた。之は今後出演者各位
 に於て充分改める必要があると思ふ。
 正時に初めれば観客の出足も早くなる
 し、終演も早くなる。折角近年出演者
 諸兄が外部より指導者を招き熱心に稽
 古せられ追々上達されるのに改良すべ
 き時間の点をなおざりにされるのは甚
 だ遺憾である。尙今一つの問題は芸事
 上達の為にも時代に添つて一歩前進
 し、喜多流のみに限らず他流の能も上
 演出来るようにすれば互の競争心も出
 て芸自体がしつかりして来ると考ふる
 が如何でしょう。何分奉納の事である
 から広い気持で本町が主体ではあるが
 奉納に志ある人は誰でも奉納が出来
 道を開く事が出来れば、より向上発展
 が出来るのではないだろうか。経費の
 面からも本町以外の奉納出演者からは
 出演協賛料を納入せしめればその協賛
 納入金を装策の保存修理に転用し、或
 は能舞台の改造費に積立てるとかすれ
 ば神事能出演申込はあると思ふ。猶新
 城の御祭礼の行事及び此格式ある神事
 能を市当局の援助で認識させるように
 各方面へもつとPRすべきであ
 る。現在の如きマスコミ万能の時代に
 此有力なるマスコミの力を利用して全
 市を挙げて郷土芸能保存会を結成し
 て、各地へPRして観光客誘致を志し

てこそ、市になつた意味がより一層有
 意義となり、新城能の発展は北設地区
 唯一の名物として有名になるだろう。
 次に本年の奉献能番組左の通りであ
 った。

能 小鍛治 東北 海士
 狂言 空腕 伯母ケ酒 雷
 名取川 蚊角力 仏師
 仕舞 独吟 囃子 等
 こゝに新城能の発展を願う余りいさゝ
 か苦言を呈して後進の方々のよき指針
 としたい。(53、10月記)

おひらき 楽師協議会

- 一〇、三〇 桂会 後藤社中
- 高井 敏雄 囃子小鼓披キ
- 高橋喜代子 " " "
- 伊吹 政子 " " "
- 堀 政子 " " "
- 一、三 婦人師連合会 林蔵社中
- 石井 素子 囃子シテ披キ
- 一、六 淡交会 橋岡社中
- 伊吹洋一郎 能土蜘蛛シテ披キ
- 一、三 幸友会 福井社中
- 平岩 氏虎 囃子小鼓披キ
- 辛川 順子 " " "
- 生駒美代子 " " "
- 大森英三郎 " " "
- 辰巳 杉原 " " "
- 葛原 正枝 " " "
- 丸岡 真理 囃子シテ披キ 林蔵社中
- 九岡 勝利 能舟弁慶大鼓披キ 永田社中
- 吉田 俊彦 能天鼓シテ披キ 内藤社中
- 鈴木 義久 能舟弁慶シテ披キ
- 一、九 霞会
- 吉本 仁礼 囃子シテ披キ 内藤社中
- 落合 豊 " 小鼓 " 田鍋惣太郎社中
- 二、四 豊会
- 三神 広子 能小袖曾我シテ披キ辰己社中
- 鶴見 宗子 " " " "
- 内藤 純子 能田村前シテ披キ 内藤社中
- 彦坂 光代 " 后シテ披キ 畑社中
- 久野 光代 能小袖曾我大鼓 " 永田社中
- 水谷 文雄 " 笛 " 寛社中
- 一、二七 掬水会
- 祖父江修一 囃子シテ披キ 柴田社中
- 石田 糸代 " " "
- 二、一 河村一謡会
- 比留間 囃子シテ披キ 河村社中

新年 賀 謹

- 一 河村 鉦二 会
- 石井 孫太郎 会
- 博 勝 会
- 藤 門 会
- 長 生 会
- 竜 吟 会
- 霞 田六郎兵衛 会
- 潤 水 会
- 観 水 会
- 観 野崎 会
- 高 久田 秀雄 会
- 高 安 会
- たなびき 会
- 名古屋能楽鑑賞会
- 名古屋能楽俱樂部

- 風 韻 会
- 幸 友 会
- 掬 水 会
- 曲 水 会
- 金 竜 会
- 春 鶯 会
- 正 楽 会
- 松 謡 会
- 祥 雲 会
- 清 風 社
- 掬 水 青陽 会
- 能楽協会
- 名古屋支部
- 支部長 田鍋惣太郎
- 狂言 共同社

狂言

昭和36年2月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5ノ2
 井上重兵衛方 電話1430
 名古屋狂言共同社
 名古屋印刷社 電話1100
 株式会社 地上社

狂言人語

歌村彦四郎

○能楽協会名古屋支部新年会

一月三日恒例の名古屋支部新年会が開かれ「四海波」の斉唱に始まり囃子数番を演じ終つて、支部総会にうつり役員の改選を左の通り決定しました。

- 支部長 田鍋惣太郎 企画 増田 一雄
- 副支部長 柴田初太郎 内藤 泰二
- 監事 高安 滋郎 大塚 一二
- 全 事 林 隠蔵 常議員 藤田六郎 兵工
- 全 計 歌村彦四郎 全 西尾孫太郎
- 全 鬼頭 八郎 全 前田 昌広
- 全 井上松次郎 全 太田重次郎
- 全 田鍋惣一郎 全 真柄 米次
- 全 鬼頭 五朗 相談役 西村 弘敬

右終つて福引の余興に打興し、神酒とビールを満を引いて新春を寿ぎました

○清韻会四十周年と宝生会

一月十五日の清韻会大槻十三氏が元氣に安宅を舞はれ門弟殿島修二氏が大曲道成寺を披露、田鍋惣一郎氏の小鼓と相まつて見事にままりました。

○大藏虎明三百年祭

一月十五日東京にて開催東西狂言大家を集め盛大に開かれました。大藏流宗家弥太郎氏は来る五月五日名古屋の朝日狂言会に大曲「釣狐」を演じられる予定であります。

○九皇会十周年

三月五日観世喜之氏社中の同会では会

員の植村真太郎氏の古稀、同中村つゆさんの喜寿を祝し植村氏は安宅の大曲中村さんは目出度狸々を舞はれますが今から中々の評判評判。

○野村又三郎家祖先祭

三月二十一日東西狂言名人を迎え能二番狂言六番の賑かな催しが開かれます

名古屋和泉会いよいよ発足!

かねて計画中の和泉流家元を主体とする名古屋和泉会は発会をかねて狂言小舞の会を開き愛好者の御来観を歓迎いたします。

日時 二月二十三日午後六時
 ところ 栄町中区役所ホール

狂言小舞の会

挨拶 徳川 義親
 狂言と小舞について 和泉 保之

見づくし

- 番匠屋 河村 丘造
- 名取川 佐藤 卯三郎
- 鐘の音 井上松次郎
- 奈須興市語 和泉 保之
- 宇治の晒 佐藤 秀雄
- 小原木 河村 丘造
- 石河藤五郎 佐藤 卯三郎
- 七ツ子 井上松次郎
- 田植 和泉 保之

以上

名古屋和泉会会長 徳川 義親
 賛助 尾山 和男、岡谷 惣助

尾山 和男、岡谷 惣助

二月の催能

- 二、五 たなびき会囃子会 於熱田能楽殿
- 二、一二 名古屋観世会初会能 全年前十一時
- 能 観世元正 高安滋郎
- 能 井上松次郎
- 能 社若 観世元正 西村弘敬
- 能 狂言 佐藤卯三郎 河村丘造
- 能 小袖曾我 武田太加志 山階信弘
- 能 猿々 橋岡久馬 西村弘敬
- 二、一九 壺泉会業謡囃子会 全年前九時
- 二、二三 名古屋和泉会結成 午後六時
- 狂言小舞の会 於栄町中区役所ホール

狂言「鶯」のかいせつ

梅若どのと云う小人の家来、まことに狂言式のとげた標本みたいな好人物、我が主人に小鳥をあげようと差し棹をかたげ野へ出かけます。これより先きに鶯を鳴きならさうと野へもつて出て鳴き声を聞いて楽しんでる風流人とのトラブルを。

和泉流狂言記(続2) (門水翁遺稿)

遺稿「御酒落伝」が刊行されたのでそのうちの狂言記を抜す。三元文のままもそもも能狂言は今より四五百年も前に出来たもので、能は真面目なものの狂言はおかしなもの、この二ツを一つとして能狂言と唱えて今に伝つてをるが、最初は歌舞として田楽の能が起りそれが一転して猿楽の能となり、足利時代に至つて大いに発達して能楽となり、狂言となつて生れ出たものである。能楽の根本とも云ふべき翁のとうとうたりの式法が出来た当時、白式の面の翁は能の太夫が勤め、黒式の面の翁のおかしみを勤める役は狂言太夫と定つて以来、狂言師において能の問の

答へを補ひ続いて能と狂言を一番おきに演ずることに約束が結ばれたものである。

そこで、この狂言の作者は誰人であるかと言へば、比叡山北畠の住、玄恵法印といふ人が七十番ばかり作つたといふこと、その他では今春四郎次郎、宇治弥太郎二代の内六十番も出来、一休和尚や親鸞上人なども、慰みに少々作つたといふ説もある。とにかく徳川年代の初めには二百五十番組となつた。

狂言の作意と趣向について言へば、大体は滑稽を主台として、当時の世相各階級の人物の情態を穿ち、喜怒哀楽を捉へて諷刺的に面白おかしく構成したものである。中には伝説や童話や歴史の題材もあるが、全体の作柄を通して、最も古雅で、無邪気で、脱俗で理窟張らぬ、洗ひ芸当の喜劇に出来ている。なお二百五十番中、類似の趣向をとつた狂言も多少はあるが、大別してみると、神事、大名物、太郎冠者物、坊主物、山伏物、女物、盗人物、智物、百姓物、立衆物、その他種々のものも沢山ある。

それで、その登場人物の性格を、かいつまんで申せば、お大名はまず痴鈍な馬鹿大名が多く、家来の太郎冠者次郎冠者は存外小利口で、短気な主殿の機嫌に取入る筋合ひ、また分らず屋の主人公を愚弄したり、困らせたりする横着者の太郎冠者、酒好きもあれは腑抜け魂もある。僧侶はみな禿僧で破戒坊主をあらはし、山伏は威張り散らす割合には一向に祈禱に効験が少なく、どれもこれも失敗が多く、智殿はいづれも無教育で男の宅の宴会に赤恥をかいて帰る。女は亭主より権勢が強くて、いつも宿六先生閉口するという筋のものが多い。(つづく)

三月の予定

三、五 九皇会創立十周年春季大会 午前十時 於熱田能楽殿	能 田村 梶田 佐藤秀雄	能 羽衣 浅野静子	能 鏡男 井上松次郎	能 安宅 植村真太郎	能 狸々 中村つゆ	能 三、一二 正楽会春季大会 ツレ 菊屋 稔	能 竹牛島 加藤丈太郎	能 小仙曾我 五郎 佐竹 船三郎 山森幸雄 男王 伊藤 実	能 土蜘蛛 小瀬松子	能 三、一九 鑑賞能 野口録久 辰巳 孝	能 草紙沈 宝生九郎	能 黒塚 宝生英雄	能 入間川 野村又三郎	能 三、二一 野村家祖先祭 梅若彌義 観世壽之 大槻十三	能 融 茂山千五郎	能 吃り 佐藤卯三郎	能 宗論 野村又三郎	能 子盗人 三宅彌九郎	能 武悪 茂山藤五郎	能 三、二六 物水書場 加藤丈太郎 佐藤卯三郎	能 竹生鳥 於熱田能楽殿
---------------------------------	--------------	-----------	------------	------------	-----------	---------------------------	-------------	-------------------------------	------------	-------------------------	------------	-----------	-------------	---------------------------------	-----------	------------	------------	-------------	------------	----------------------------	--------------

狂言周辺

「寒」に入ってから、文字通り寒さがきびしくなつて、名古屋にも雪がもつた。明るく日静閑え所用の電話をかけたら、雪もみず、富士山もきれいに姿を出していた由、ところがその日川崎九淵古老の訃報が新聞にのせられた。何か能楽のもつ節度といった大事なものが一枚大きくどこかえ持たれてしまったような気がしてならない。今は亡き兼資氏とおなじくおだやかそうで、実はなかなか「皮骨な」ところのあつた大家、かつての弓川所演の「関寺小町」の「鐘の聲」にあわせてうった大鼓の一打はもはや故人をしのぶとをいふ思い出草となつてしまつた。その後、金剛巖君が「殺生石」を演じたとき、松野奏風氏に付きそわれて、しきりに舞台にみいつておられた姿が私には最後だとおもいます。冥福を祈りたい。

さて、風邪で十日もねた一月は、まだ一度も能楽殿えいかないので、狂言も能もみせてもらつていない仕末。テレビとラジオでは「嵯峨の雨」、一月の二日には「夷大黒」(大蔵弥太郎)、「文荷」(千五郎)、「若菜」(野村万蔵)をさき、また年末には「鐘の音」(弥太郎)、正月には宝生流の「西王母」などをみ、「六平太芸談」を実に楽しくきいた。「嵯峨の雨」は小歌風で、どこか地唄の味を匂わせ、六平太翁が「定家」のむつかしさをしきりにといておられたのが、記憶にのこる。本では昔川久氏の「狂言の世界」が「能の世界」につづいて刊行。写真が多くはさまれ、一見して弥五郎翁の「福の種」とわかる一頁太のものがあつて、味深い。能の本の方は先頃外遊のえ、カバンの隅にでもおいれください。

い、日本の古典芸能紹介のためとおねがひしたが、この本が少し早く出たらとおしされた。古川さんにこのことをはなしたら、矢張り氏からも、外人の参考書になつていると、この間うかがつた。また、日本比較文学会では「エズラ、パウンドの能楽」の報告がされたことを、最近の英文学の月刊本(英語青年)で目にとりた次第。

この世界も、一つとらで渦をまいて舞い舞いしているようで、その実、よかれあしけれ、流れている。そして古風なものかならずしも古くはない、新しいものかならずしも新風のいぶきをかんずるとはかぎりぬと説法しているようだ。モダトンな中にどこか伝統の美、よさをただよわせなくてはなるまい。

大きくところによると、フランスでも園柄にもよるが、話す英語の習得はなかなかのわざ、イギリスでも、文学研究を志す学生たちの、伝統としての古典と聖書について十分知ることがないと報じている。ふりかえつて、この国でも、狂言や能は、西洋よりも親近感をおぼえてもらえず、現代を截つて表現するに大きな資料とならない有様のように、果して、それほど文化の末席に座を占めなくてはならないのか占めたままの様相をそばにたつて、また西洋が新作にとりいれられても、時の流れにしたがつて、じつと眺めているままでよいであろうか。

狂言研究テーマは真実「広く大きい」、途中で息切れしないように、死物化の翼がすつかりおおいかがぶらぬ間に新しい視野をもたねばならない。

老舗 信用第一
(古本最高価買入)

前通赤区中屋名
電話 24 3 4 1 0

文光堂

各種新刊書籍・雑誌

各宗仏書とお経本

狂言

昭和36年3月1日発行
 発行所
 名古屋市中区表門前町5/3
 井上重兵衛方 電話1430
 名古屋狂言共同社
 印刷所
 株式会社地上社 電話1196

第三回朝日狂言会予告

五月五日於熱田神宮能樂殿

主催 朝日新聞社
狂言共同社

今回は大藏流宗家大藏彌太郎氏を迎へ、大曲「釣狐」を所望いたしました。御尊父彌五郎翁はじめ御一門の御来演と、その上和泉流宗家泉保之氏も来援すると云う友情濃やかな兩宗家の出演であります。何卒御期待下さいませ。

狂言組

鼻取相撲 市橋 良治 山本光次郎
 大野 弘之 茂山幸四郎
 文 荷 茂山幸四郎 茂山幸五郎
 井 杭 佐藤卯三郎 井上松次郎
 石田 喜樹
 系子 羯鼓 小鼓 田鍋惣一郎
 大鼓 西尾孫太郎
 釣 狐 大藏弥太郎 茂山 喜三
 梅志ばり 河村 丘造 佐藤 秀雄
 野村又三郎 井上松次郎
 和泉 保之 井上松次郎
 梅 以上 他

指定席 四〇〇円
 自由席 三〇〇円 障上二〇〇円

三月の催能

三・五 九皇会創立十周年春季大会
 午前十時 於 熱田能樂殿
 能田 村 梶田 俊 西村 欽也
 能羽 衣 浅野 静子 高安 滋郎
 狂言鏡 男 井上松次郎 河村 丘造
 能安 宅 植村真太郎 高安 滋郎
 野村又三郎
 能狸 々々 中村 つゆ 西村 弘敬
 三・二二 正楽会春季大会午前九時熱田能樂殿
 能竹生島 ツレ茹屋 稔 加藤丈太郎
 間 佐藤 秀雄
 能小袖曾我 五郎佐竹 船三郎 浅井 保
 十郎山森幸雄 皇王 伊藤 実
 能太刀奪 河村 丘造 井上松次郎
 間 大野 弘之
 能土蜘蛛 小瀬松子 伊藤文恵
 三・一九 名匠鑑賞能 十二時半 熱田能樂殿
 能 蛸 丸 野口 録久 高安 滋郎
 辰巳 孝
 能草紙洗 野村又三郎 西村 弘敬
 間 井上松次郎 宝生 九郎
 能黒 塚 宝生 英雄 高安 滋郎
 間 佐藤 秀雄
 能入間川 野村又三郎 河村 丘造
 野村又三郎 熱田能樂殿
 三・二二 野村家祖先祭
 能千 手 梅若 猶義 高安 滋郎
 親世 喜之

狂言二千字 茂山千五郎 茂山千之丞
 吃 里 佐藤卯三郎 井上松次郎
 宗 論 野村又三郎 大野 弘之
 腰 折 三宅藤九郎 河村 丘造
 和泉 保之 井上礼之助
 子 盗 人 茂山幸四郎 野村 万作
 武 悪 野村 万藏 野村又三郎
 大槻 十三 野村 万作
 融 間 佐藤 秀雄 西村 弘敬
 三・二六 掬水青陽会 午前十一時 熱田能樂殿
 能竹生島 加藤丈太郎 高安 滋郎
 間 佐藤卯三郎
 能東 北 塚本 秀雄 西村 欽也
 間 佐藤 秀雄
 能 鶴 間 觀世 武雄 西村 弘敬
 間 井上松次郎
 狂言許はじかみ 大野 弘之
 市橋 良治
 狂言の解説
 鑄男(かがみおとこ) 越後の山家の男、都へ訴訟にでて目出度く帰国するにあたり、初めとして鏡と云うものを買ひ求め、女への土産として喜び勇んでかへりました。女も初めて見る鏡に女の姿を見て自分の姿のうつつたことをしらず、男が都から女を連れて戻つたものと思ひ違へ男を追い込みます。女の嫉妬を扱つた狂言の代表作です。
 太刀奪(たちうばい) 北野へ参詣に出た主従二人、通りかかった他家の奉公人が見事な太刀を持つていて却て主人から預つた刀を盗らうとする。奉公人が帰りに此処を通ると云つたので、主人と二人で待ちうけ奉公人を捕え、まんまと縄をかけたが……太郎冠者ののんびりした仕うちは、狂言らしい笑いであります。
 入間川(いるまがわ) 訴訟のため長らく都に留まつていた東國の大名、やつと國へ帰る途大きい川に出ました。川向ふの人に聞けば入間川と云う、それにつけて思ひ出した入間川と云う逆言葉、教えられた浅瀬を反対にとり深みにはまりましたが、入間の何某の言葉つかひの面白さに興にのつて太刀、扇、小

袖までやつてしまします。それでもついに取り戻すなかなかチャツカリやの大名振りであります。
 二千字(じせんせき) 許しを得ずに京見物をした下人を咎るつもりで出かけた主人、京見物と聞いて都の話を聞くうち、話を稽古して来たと云うその話は先殿が奥州征伐のおり、大將軍八幡殿へ祝言として「二千字の松にこそ、千歳を祝ふ後までも、其の名は朽ちせざりけれ」とうたひ恩賞をいただいた大切な謡である、みだりにうたうものにあらずと、手討にせんと振り上げた太刀の手つきが先殿そつくりと云う太郎冠者の言葉に、親に似た狂言、働きのにぶい吃りの夫、女房に迫廻され仲裁人に悪しきまに告げる女に腹は立つつか口がもとおらず、弁明のもどかしさに謡によつて解決されます、稀れに見る傑作であります。佐藤卯三郎氏の得意のものとして定評があります。
 宗論(しゅうろん) いつ見ても面白い狂言、法華と浄土の二人の僧を配しての宗旨争ひです、云いつのつて師念仏にまで発展します、そして踊つてゐるうちにお互に題目をとりちがへ「今在西方妙阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世利益、同一体」と此の文を聞く時は、法華も弥陀も隔てはあらず、今より後は二人が名を、妙阿彌陀仏とぞ申しける」と謡ひ舞い納めます。野村又三郎氏と河村丘造氏何れも先代うつしの好一對と云へませう。
 腰折(こしりのり) 大峯の勤めを終へて下山した山伏、久々で祖父を訪れ、とみに曲つた祖父の腰を見て、行法の功力で伸ばさうと一折りすれば、祖父の腰は見る見る伸びる。が伸びすぎて苦しいと祖父が云へば、山伏は心得てまた一折りするが免角行力の險めが強、今度は腰が前へ屈みすぎ祖父はノメつてしまふ大失敗。
 とかく狂言の山伏は空威張りの典型にされていますが、これも其の域を脱せず三宅父子の力演でなほさらに面白さを満喫出来ることと思はれます。
 子盗人(こぬすびと) 博打に負けて新期に開業した盗人、開業早々に忍び込んだ大家の座

歌に子供が寝かせてありました、子煩悩のこの男盗みを忘れていゝるいとあやして喜んで居るうちに家人に発見されます。狂言界の長老茂山弥五郎翁の枯淡な芸域に接することは近來名古屋に於ける喜びてせう。

武悪(ぶあく) 召使いの武悪(なまえ) の度重なる横着が主人の氣隙を損じました、太郎冠者は武悪を成敗するように主人より云いつかり討手に向いましたが、朋輩のよしみとして哀れを感じ遂に命を助けます。主人は武悪を討つたと聞いて心を慰めに東山へゆく途中、これも清水へお礼参りに来た武悪と出会いますが、太郎冠者の機転で武悪を幽霊に仕立て、冥土の有様などを語らせます。狂言のうちでも歌舞伎に近い劇的要素を多分に持つ見こたへのある狂言であります。野村万蔵氏これを劇にならぬ程度に見せられることとたのしみ一つであります。

醉蓋(すはじかみ) はじかみ売と酔売が都へ商ひに上る途で出会ひ、お互にその系図を語りあい、そのうへ秀句のやりとりを面白く展開する軽い狂言であります。新人の努力を御覧いただき度い。

狂言小舞と初期歌舞伎 服部 幸雄

今度、「名古屋和泉会」が結成されて、その記念の意味を兼ねて「狂言小舞の会」が催されたのは、甚だ意義深いことであつて喜ばしい。

ところで、このレパートリーを見てつくづく思うことは、狂言小舞と初期歌舞伎との密接な交流関係である。

成立期の歌舞伎は、中世的な芸能であつた曲舞・能の「まゝ」に反抗して、当時民衆の間で大流行していた風流踊を基盤とする「おどり」の芸能を看板にして登場し、爆発的な人気を攫ち得た。しかし、それらの歌舞伎踊は単調な総踊のみでなく、スターたちの芸を助け、舞台上ヴァライエティを与える役割をもつて狂言師や猿若との提携がなされていく。すでに阿国歌舞伎の時に「三十郎といえる狂言師」と組んだことが記録にあり、女歌舞伎の座が「さまざまの踊に狂言を交え」という資料も見える。実際歌舞伎の座に入つていつたのは、所謂四座の猿來に属さない群

少狂言師たちで、例えば南部・称直流などがそれである。慶安・承応の頃、若衆歌舞伎の時代になると、狂言との交流は愈々活発になつた。狂言小舞が踊の芸能を吸収して「踊り節」を取り込む(「名取川」・「昆布売」・「呼声」)と同時に、狂言そのものの演技も正統派狂言師大藏虎明の憤慨、慨嘆をよそに甚しく歌舞伎に接近していつた。驚流の狂言においては、特にその傾向が著しい。歌舞伎の側では、文芸における仮名草子のひとつの傾向にも窺われる、中世的なものへの憧憬とその近世化の趨勢に影響されて、能狂言への近づきを露らわした。一つには歌舞伎が権威を持ちたがつた結果でもあつたが、「踊」にかわつて「舞」が正統であるとして表面に押し出されることになつた。「小舞十六番」の類は、こうした背景の上に制定され伝承された。

ここに至つて、歌舞伎は盛んに狂言小舞を取り入れ、狂言小舞はまた歌舞伎の踊歌を利用した。狂言小舞は、江戸時代初期までは流動していつたのである。

「小原木」は、狂言から女歌舞伎へ「一の瀬」「あれ出て見さい」は、女歌舞伎から狂言に移されたものと考えられる。また、「宇治の圃」「海道下り」「七つになる子」「津の國」は、狂言から若衆歌舞伎へ入つたと見られる。

『三壺問書』は、金沢才川の若衆歌舞伎興行で「其狂言にはやし物あり。はんま千鳥の友呼び声はちりやちり、如此はやす事あり」といひ、又同じく右近源左衛門が狂言「若菜」の趣向に女装して「海道下り」を舞つた様子を丁寧に記録している(慶安三年)。

野良歌舞伎の踊歌である『延宝三年書写踊歌』の「上の山踊」には、もと木遣り歌であつた「石河藤五郎」の替歌が入つている。やはり野良歌舞伎の公演記録「大和守日記」には彫しい小舞の上演が見られ、小舞庄左衛門らの活躍が目立つていつた。その実態について、右近源左衛門が「せなに子をとおひ七つになる子」を「うちわまい」にして演じていることなどから、相当な歌舞伎化が想像される。いわば踊とそんなに違わないものであつたのであろう。「おどり小舞」とか「小舞おどり」

とかの名称は、その間の事情を語つている。若衆歌舞伎から野良歌舞伎にかけての狂言小舞との交流には、はじめ喜多七大夫の弟子で舞の名手といわれた右近源左衛門が大きな役割を果していることは疑い得ない。「歌舞伎の小舞」は、やがてこの中から拍手舞を生み出し、更に後に所作事へと展開していく。いまひとつ、野良歌舞伎が狂言から受け継いだ芸能で重要なものがある。それは、後に「物語」という人形及び歌舞伎の技巧に成長していつた「語り」である。「大和守日記」には「那須の与一」の仕形話の上演が頻繁に見られる。

女歌舞伎における猿若の独狂言もやはり狂言形式の巧みな利用であつたし、大小狂言も猿若と狂言師との合作によつて生れたと考えられる。

このように概観したとき、私は、いまは判らなくなつてしまつた初期歌舞伎の面影を想像することのできる一つの拠り所として、狂言小舞が実際に見られることを有難く思い、その正しい伝承保存を願わずにはいられない。(一九五六・二・二〇)(演劇研究家)

四月の予告

- 四・一 博勝会 於熱田能楽殿
- 四・二 中日五流能 於泉文化講堂
- 四・九 中部金剛会 於熱田能楽殿
- 四・一六 第二回名古屋観世会 全
- 四・二三 久田観正会春季大会 全
- 四・二九 幸友会福井追善能 全
- 四・三〇 同 唯 子 会 全

おひらきのしらせ 楽師協議会
 二・一二 電吟会にて
 岩田幸子さん 唯子・笛・ヒラキ 寛社中
 二・二六 たなびき会
 後藤幸一郎氏 嚙子小鼓 乱鼓半 田鍋惣一郎社中
 江崎 重雄氏 シテ 内藤社中
 名古屋和泉会

狂言和泉流宗家泉保之の後援と、名古屋の狂言を育成するため徳川義親氏を会長に諸名士の賛助を得て結成致しました。第一回の公演を今秋十一月十八日に開きます。御愛好の皆様御入会を御願ひします。

美しい染上り 別染呉服

染と呉服なら



外商部 電 97-2182

本店 名古屋東片端 交叉点角 電 97-2141
 広小路店 名古屋朝日ビル めいせん内 電 23-6467

狂言

昭和36年4月1日発行
 発行所
 名古屋市中区東門前町5ノ2
 井上重兵衛方 電1430
 名古屋狂言共闘社
 印刷所
 株式会社 地上社 電1198

5月5日 午後1時
 熱田神宮 能楽殿

第3回 朝日狂言会

流泉 宗家 出演
 和泉 流泉

社 同 新 共 日 言 朝 狂
 主 催

四月の催能
 四・二 中日五流能 文化講堂
 四・二 博勝会前九、三〇 熱田能楽殿
 加雲雀山
 間 井上松次郎 山本光次郎
 大野 弘之
 能 雷 電 佐藤卯三郎
 能 成上り 河村 丘造 佐藤卯三郎
 能 熊 野 大塚 一二 高安 滋郎
 能 藤 戸 豊島弥左門 西村 弘敬
 能 間 佐藤 秀雄
 能 ぬげがら 井上松次郎 佐藤卯三郎

四・一六 第三回名古屋観世会正午熱田能楽殿
 能 善知鳥 柴田初太郎
 能 間 大野 弘之
 能 班 女 杉浦 義朗
 能 間 河村 丘造
 能 鞍馬天狗 梅若万三郎
 能 間 佐藤卯三郎
 能 瘦 松 河村 丘造 井上松次郎
 四・二三 観正会春大会前、三熱田能楽殿
 能 小 督 伊藤 洋子
 能 間 吉川宇良子 高安 滋郎
 能 乱 久田 秀雄
 能 狂言 争 河村 丘造 佐藤 秀雄
 四・二九 九世福井五郎追善能 熱田能楽殿
 能 橋弁慶 辰己 孝
 能 間 野村又三郎
 能 杜 若 宝生 九郎 西村 弘敬
 能 狂言 止動方角 河村 丘造 井上松次郎
 能 二部 午後三時半
 能 望 月 梅若 六郎 高安 滋郎
 能 間 井上松次郎
 能 葵 土 梅若 泰之 西村 欽也
 能 間 佐藤 秀雄
 能 狂言 名取川 野村又三郎 佐藤卯三郎
 四・三〇 同上難子会
 能 成上り(なりあがり) (歌村彦四郎)
 主の供をして北野へ参籠し、まどろむうち
 太刀を青竹にすり替へられ、その申訳に山芋
 が鱧になつた謬から、太刀が青竹になつたと
 こじつける。
 能 脱 殼(ぬげがら)

酒飲みの太郎冠者、つばらつて使いに
 出たが、途中で正体もなく寝込んでしま
 います。やがて起き上つた時は、サア大
 変人間にあざる鬼になつておりました。
 瘦松(やせまつ)
 瘦松、肥松とは山賊の合言葉、仕合
 せの悪いのを瘦松という。山賊が稼
 ぎに出て通りかゝつた女をおどし、
 その持ちものをとりはしたが、逆
 に長刀を女にとられ追われます。
 歌争(うたあそび)
 野あそびに誘ひに来た友達に、芍
 薬の花を見せて風流ぶつて吟じた歌
 を相手に笑われたので、今度は相
 手の詠んだ歌を笑ふ「咲くやこの
 花」と「芍薬の花」「風騒ぐなり」
 「風さわぐんなり」と秀句を知つた
 か振りするおかしさ。

止動方角(しどうほうかく)
 気短な主人が叔父の許へ茶壺、太
 刀、そのうへ馬まで借りにやつた太
 郎冠者の帰りが遅いと迎えに来た主
 人が散々に叱りつけます。フトした
 ことから太郎冠者が主を馬にして仕
 舞ふ騒動な狂言。
 名取川(なとりがは)
 物忘れのよい坊さんが折角付けて
 もらつた名前の川を渉ると川に流して
 しまひました、その名前を掬おうと川
 づくしの謡で舞となります。

名古屋の狂言師鬼島寿作 小林 責
 私が鬼島寿作という名をはじめて知
 つたのは、野々村戒三氏の「狂言の展
 開」(『能楽全書』収載)に「鬼島は明治中
 期の狂言師で、庄市・与作に類する者
 であつた」と記されているのを讀んだ
 時であつたと思ふ。明治維新後にお
 ける東京狂言界の草分けで、能楽復
 興の功績者でもある三宅庄市・野村与
 作に類する者であるならば、その際
 寿作の果した役割も大きかつたに
 ない。その寿作の事跡はほとんど知
 られていない。その名を注意するよ
 うになつた。その名を注意するよ
 うになつた。

これによれば、寿作は名古屋の人、
 家元弟子である早川家四世幸八の門
 下で、したがって初代井上菊次郎など
 とは同門になる。そして上京の時期
 は、庄市・与作の出来た明治八年頃
 から萬斎が上つた明治十一年の間に
 推定され、江戸時代における和泉流
 の中心地名古屋から移入した者とし
 ては第一番といふことになる。なお彰
 義隊生き残りといふのは、その後触
 目した「野村萬斎思出話」(第一期
 『狂言』昭和一三・七)に「鬼島鬼作

東京に於ける和泉流の起源」の項の
 記載からいふものである(「野村万造氏」
 とはのちの萬斎)。長文だが引用し
 ておく。
 此和泉流は能楽に対する總ての事を
 御贖好あそばさされたために、恰度
 其頃の三条公、岩倉公など、仰せら
 れる方々が京都からして和泉流の狂
 言師三宅庄市をお呼び寄せになり
 ましたのが抑々第一着なのでござい
 ます。夫れから大聖寺様(前田利
 變、筆者註)が野村与作を加賀か
 らお呼び寄せになりましたのが是れ
 が第二でございませう。さて此次に
 鬼島寿作と云ふものも上京致しま
 して与作の弟子となりました。此
 鬼島と云ふものは尾張の人でござ
 いましたが、誠に奇人でございます
 以上三人とも今日皆故人になつて
 いるのですが……(中略)元來此鬼島
 は尾州家の目抜師でございましたが、
 同國の早川幸八と云うものに付いて
 狂言を修業したのでございませう。
 それで目抜師は目抜師、狂言師は狂
 言師で、いづれも皆堪能なるもので
 ございませう。が、猶も柔術、劍術
 は奥儀皆伝までも極めた人でして
 既に上野の影義隊の中に加わつて
 戦つたほどの人でした。其後は前
 の野村与作の弟子分となりましたが、
 此鬼島に就て柔術の奥儀を得たのは
 今の山本東次郎さんです。私も何うか
 教はりたいと思つたのですが、お前は
 気が勝つてゐるからウツカリ教えて
 何んな事をするか知れないからと言
 つて断られました。金春武三さん(今
 の八郎)も矢張り断わられた組です。
 此寿作などは我々の中の潔白な人
 として三井武之助様などには大層
 寵愛された人です。

花月編『能楽百話』(明治三六、わんや
 書店)に載せられている「野村万造氏
 芸談」の一

花月編『能楽百話』(明治三六、わんや
 書店)に載せられている「野村万造氏
 芸談」の一

というのは、目貫を彫るのが本職でして、いはば鋳屋さんでした。名古屋の人で、御維新の時官軍に加つて居たが、途中で逃げ出したなんて逸話があります」と、敵味方逆の伝説になつて居るほどで、あてにはならないと思われ。

寿作について書いたものを、私はまだ以上のほかは見えていない。そこで石渡繁三の書き留めた明治十五年〜三十年間の芝能楽堂演能記録(池内信嘉「能楽盛衰記」下所収)及び「故大和田大人日記抜萃」(明治十六年〜二十五年)「能楽」(明治四四〜大正三連載)からその名を拾うと、明治十五年三月から明治二十二年十月の間に、宗八・吹取・金津地蔵・二人大名・吹取・六人僧・隠狸・文山賊・弦師(橋弁慶間)・福の神・さつわ・井船・鞍馬参・筆・子盗人・柿山伏(上演年月順)計十六番のシテと、武悪・附子で山脇元清のアド、釣針で立衆を勤めている。(姓名を石渡の記録ではいづれも児島寿作または鳥寿作とし、また大和田建樹の日記にも鬼頭寿作となつているのがあつたが、これらは鬼島寿作の誤記と考えてよからう)

そして、私が現在寿作の名を最後に見出すのは、明治二十三年、山田法相別邸開催の演能と推測される行幸能の役割書である。これは「野村萬斎思出話」五(「狂言」昭和二二・一一)に凸版印刷されているもので、シテの三宅惣三郎以下、和泉・大蔵・驚三流の、おそらく当時東京在住のほとんどの狂言師と思われる十六名が名を連ねており、その地位のほぼ想像される興味ある資料であるが、寿作の名は老人立衆の四番目に記載されている。しかし、その後寿作はどのように生き、どのように死んだか——前掲「野村万造氏談」によつて明治三十六年には故人になつていたことはたしかだが、一切わからない。

察するに寿作は、庄市・与作について東京へやつて来たものの、さらに廻を接して上京した萬斎・惣三郎・元清・高島弥五郎ら名家あるいは熟達の上の間にはさまれてかげのうすい存在となり、舞台上の活躍もさしたるものがなかつたのではなからうか。とわいえ、なんと言つても東京狂言界草分けの一人であることに間違ひはなく、寿作の事跡や家

風はもう少し明らかにしておきたい。姓にしても正確には「キジマ」か「キトウ」か「オニシマ」か、それさえわかつていない。ここに紙面をけがしたのも大方の御指示が得られればと期待してのことである。

和泉流狂言記(続3) 門水翁遺稿

遺稿「御酒落伝」が刊行されそのうちの狂言記の抜すい。(元文のまゝ)

以上のやうな動作を、芝居や二〇加でみるならば、抱腹絶倒、大口あいてゲタ〜と笑わねばなるまいが、狂言でみれば然うではない。その仕草が野鄙でなく、古雅で上品に単純な構造に出来ておるので、腹の中でクツクツ笑へるぐらゐな高尚な笑い喜劇である。

また風俗と言語のことを申せば、足利時代の当時の風俗をそのままに写したもので、道中する男が掛褌袍に烏帽子という装束、中にも一際めだつて見ゆるは女が縫箱の着附に細い帯の前結びで、頭に白い布を巻き、その両端を長く左右へ垂れておるなど、最も古代服装である。用語はこれも室町時代に京都を中心とした上方言葉が多く用いてある。中には狂言独特の用語もあつて「これはいかなこと」「一段でござる」「頼ふだ人」「なか〜」「一定か」「おんでもないこと」などがそれである。

それで風俗と言葉も創立当時そのまゝで少しも手が入れてないから、四、五百年前の風俗は狂言によつて眼前にみる事が出来る。かくも歴史的価値ある優美な芸術であれば、ある方面の人物はこれに着眼して、趣向を不慮に盗み出し、わがまゝに加作して、それを我物顔に劇場で演ずる俳優がある。古い時代はさておき、明治に入つて採られてゐる狂言は、釣針、素袍落、二人袴、釣針、花子(身代座禪)茶壺、悪太郎、三人片輪、吹取、棒縛の類である。

また名古屋の西川流の舞踊の内へは鯉三郎(先代)の時代から、能では石橋、狸々、羽衣、小鍛冶、吉野天人、望月、小督、紅葉狩の類、狂言では石村、文荷、末広、若菜、鯛牛、などを奪ひとられておる。

何れにも門に戸締りがなから持つて行かれ、一方は口惜しいことには、前

にも縷々述べた如く、この古典的優美な作柄の芸術をメチャ〜にぶちこわして、小刀細工を加え、色気たつぷりの三味線で踊りぬかれては、たまつたものではない。(おわり)

五月の予告
於熱田能楽殿

- 五・三 清韻会全国大会
- 五・五 朝日狂言会
- 五・七 菊水会
- 五・一四 淵水会
- 五・二〇 梅猶会
- 五・二一 霞会
- 五・二八 雄風会
- おひらきのお知らせ
- 三・一二 正楽会にて
- 岡田すゞ江さん 囃子・シテ・披キ
- 山本 一氏 加藤丈太郎社中 大鼓・披キ 河村総一郎社中

名古屋和泉会

狂言和泉流宗家、和泉保之氏の後援と、名古屋の狂言を保護育成する目的で、徳川義親氏が会長で諸名士の御賛同を得まして結成することになり、御同好の方の御入会を御願ひいたします。

第一回発会公演会は今秋十一月十八日熱田神宮能楽殿にて開催いたします。

能と狂言の絵の会

仙田雪山子画伯は名古屋の出身で、現在京都在任の私の親しい友であります。最近年功をも積み、心にゆとりが生じたか能狂言に興味を持ち、これを己れの絵にすることを念願に取り組んでおります。先般各職分方の御推奨を得まして、追々と御愛好の好評を得ております。此の機会にお好みの絵を御申付け下さい。現物作品は熱田能楽殿の廊下に展示してあります。御申込みは御手数ながら狂言方歌村又は左記へ御連絡をお願いします。

名古屋市中区山内町三ノ四一
電話 ④ 四六番 歌村へ

御観光に
御商用に

名古屋駅前トヨタビル南側

日本観光旅館連盟
日本交通公館社会協定
日本旅行社
近畿日本ツリス

旅館 むさし家

電話 ④ 1396~8

新作「君が代」で、笛が「君が代」を二遍吹き、シテはこれにつれて舞うという場面が考えられていた。桜のまつ盛り、夜来の雨も止んで、ひらひらと花びらがヒルの弁当におちかかるのも風情があつた。笛といえば、中日五流能の「瑤娥の雨」でも尺八の古曲らしいものを笛がしばらく吹くあたり、芭蕉の出立に興を添えていた。五流能では「雪まろげ」がおもしろかつた。あの日は新作の狂言と能(奥の細道)の二番が、あの能の間(あい)も見事であつたし、一日の演能をくつてしまつた感じである。どちらも賛否もごもだが、たしかにおもしろかつた。「雪まろげ」は電子音楽「葵上」と二大傑作だともう。しかし筋をとおしていうが、運びの調子がいづれも同じようであり、つやもあり、人をひきつけ、またうまい万代峰子の起用が失敗であつたり、終りの方はラジオできいたときが随分とよかつたことなど、老える点はある。それにオモテのこと、日本の神が狂言面や能面であるの顔、かたちでとりあげられるが、新面の場合、「雪まろげ」の大神にしても、能の新作のときでも、どんなに考えて刻んだか、またそれをつけて演じたか、狂言や能の神観、東西の神を現代人が芸能の上でどう表現しているか、調べるのはおもしろいテーマであらう。「奥の細道」のオモテも二度目ききんで新面だそうだが、目の下からあごにかけて、何だか工合がわるそうだし、口が歌右衛門のようだと、シテの本田秀男氏に伊勢で話した。週刊朝日の表紙絵に出ていた出城の青年悉多太子、一見女のようにだが、あごにうすくはいた青のひげが、おのづから威厳をなわす積迎の姿とみなおさせる。口元も女のようにみえ、清純。日本風でいて日本

以外の何かを切れ長の目にただよわせたり、時を同じくして目にしたのど、ことに興味ふかつた。ほかに、サンデー毎日にカラテレビの「こま、逆襲のすがた」であるが、武智鉄二氏の解説でつた。東京の白木狂言の会(二月号)のカニン夫妻の狂言談もためになる記事であつたし、近頃の「演劇界」も、カブキ新論やカブキ反省論を二つものせ、前の論文は、先行芸能(舞楽、能、狂言)の対照が刻明にされる、狂言や能の世界の人たちにもぜひ一読をすすめてほしい。飯塚友一郎氏の文章である。四月末には、本願寺能が京都である。由。五十年に一度。この前は明治四十四年の五月のことであるが、当地の狂言では、今は亡き井上菊次郎氏が「寝音曲」を勤めた。今度二度目の田鍋惣太郎氏と高安滋郎氏が参会。高安氏は「高砂」開口の大役で、今年最大の話題の一つとならう。さて、五月は朝日狂言会、古格と清新の気がみなぎるこの催しも大きな話題とならう。

てのひら 仙田雪山子

最近劇や映画で女性が男の頬を打つところがよくある、菊田一夫も「花の武士」の演出の中で、越路吹雪に松緑の頬を打たせている。男女、カミ合せ効果をねらつた演出家のテクニクだけが妙に気になる、女性に男が面を打たれるということは想像も出来なかつたことと思う。さすがに能や、狂言には無いが歌舞伎の出しものには男が男の面を打つ出しものがあつたが暴力のはねかえりにつながるものと、現代に好まれず、演出の変化としてもあまり心よくは観られない、現実には、男は青なる軍隊で面を打たれたその頃

の思い出はあきらめてはいるものの侮辱として生涯のものであつて人にも秘めて反撥の血はいつまでも胸に生きている。ちか頃の女性は赤い爪から青い髪、マンボズボンと外国の風習?をとりに入りに忙がしいようだが、女性の平手打が外国映画などから真似られてはナンセンスである。近代女性の活潑な発展が男の上に示すのではなく、あくまでも同権として平行の風習を培うものでなければならぬと思う。女性を仏像や人形の美しさの方向にのみ見るわけではないが、女性の掌は女性ばかりが持つ美しさであつて、動きと働きのものしづけさには尊敬をもつてくつぶくする。男性の頬を打つ女性は事実としては無いことであると思つて見ても、さまざまの風習がどんどんもちかまれているのをごろごるとしたら、いさゝか気になるのである。

六、七、八月予告

- 六、三 宝生流女流職分能
 - 六、四 喜多会
 - 六、五 熱田神宮大祭奉納能
 - 六、一〇 和調会
 - 六、一一 掬水青陽会
 - 六、一八 第三回観世会
 - 六、二五 宝生流定式能
 - 七、一六 故岡谷正男氏追善能
 - 八、六 支部主催普及能
- お披露
- 一、一五 請願会にて 能楽協議会
 - 殿島修二氏 能、道成寺ひらき
 - 四、九 中部金剛会にて
 - 大脇明子さん 囃子初舞台 豊里会社中
 - 野崎ふさえさん 仕舞
 - 三、一二 正楽会にて
 - 山森幸男氏 能小袖曾我初舞台 加藤文社中
 - 四、二三 観正会春季大会にて
 - 吉川宇良子さん 能、小督 初舞台 久田社中
 - 佐藤博子 さん 雛子シテ
 - 久田秀雄氏 乱披

凡ゆる工場用品御用達

機械工具商

株式会社 水藤商店

名古屋熱田区神戸町一五番地
電話 ⑦ 代表 5 2 3 1

株式会社 スイトウ製作所

プレス鋁金 名古屋瑞穂区熱田東町神明前六八
機械加工 電話 ⑧ 八四〇一番 八二二五番

鉄骨、橋梁 名古屋南区豊中町三ノ十一
製作 電話 ⑧ 〇八三一番 八七六八番

狂言

狂言人語

歌村彦四郎

第三回朝日狂言会の盛況

去る五月五日の朝日狂言会は大蔵、和泉兩流の宗家と茂山弥五郎翁をむかへ、殊に番組の編成よろしきを得て予想外の盛況でした。最近特に狂言株が上つたような感じでした、御来会の皆様は厚く御礼を申し上げます。

林恩蔵氏古稀祝賀能

五月十四日養老、竜虎の能二番に多数の門弟衆の囃子、仕舞等で盛大に与行祝福されたことは御同慶にたへない。今後共御健康で觀世流のためにつくされんことを御祈りいたします。

本願寺御遠忌能

五十年に一回の式能 本年は名古屋より田鍋惣太郎、高安滋郎の二氏が参加され、ワキ方の高安氏はこうした式能より行はれない「開口」と云ふものを演ぜられました。

五十年前には故宝生新氏の開口でした。當時は当地より亡父井上菊次郎と伊勢門水氏亡兄鉄次郎、新三郎氏の二人。私は若年のため後見でしたが、思へばそれから五十年生きた訳であり、感無量であります。

ついでながら茂山弥五郎氏よりの所信の一節を御披露いたします。去る四月二十九日京都東本願寺御年忌能楽に参勤して二回目の出頭記録

昭和36年6月1日発行
発行所
名古屋市中区東門前町5/2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋狂言共同社
印刷所 別上社
株式会社 別上社 電話1196

を致しました、過去現在に於て感慨極りなく、今日に於て眼裡に蔵するは故井上菊次郎大人翁様の「未広がり」を拜見した御芸事で御座りました。今アノ国宝「未広がり」は月の都へ持つて登られました。当時東西を通じ和泉流での御芸事は菊次郎翁様の右に出る人がないと実感を感じ、得難い教訓を得た生涯の歡喜を持つております。

アノ御芸事の御人様が浮世に似た人もないとは………。今若い人は氣の毒です、本格的狂言を見ておらぬから知らぬ訳で、書物で覚え舞台へ出れば狂言に成つていふと思つるので、結構な芸事が表現する事は望み難いのです。

注視せらるゝ目は恐ろしく良き狂言を舞台へ頭はさねばなりません。

六、七、八月の催能

六、三 宝生流定式婦人能 午後〇時半 於能楽殿

小鍛冶 須井上和子
能半 須崎恵子
因幡堂 河村丘造 井上松次郎
能 岡田川 宝生九郎 内藤泰二

紅葉狩 宝生公恵
宮下 英子
堀本千鶴子
能 喜多流鑑賞会 正午 於能楽殿

六、四 喜多流鑑賞会 正午 於能楽殿

井筒 喜多
狂言 寝音曲 野村又三郎 佐藤卯三郎
能 紅葉狩 和島富太郎

六、五 熱田神宮大祭奉納 午後一時 於能楽殿

加茂 高安 滋郎
能 班 大塚 一二
能 瓜 内藤 泰二
能 瓜 林 愿藏
能 瓜 井上松次郎 河村丘造

六、一〇 和調会 西川 司津

伯母ヶ酒 野村又三郎 井上松次郎

六、一一 掬水青陽会 正午 於能楽殿

高砂 河村 鉦二 祖父江修一
能 羽衣 觀世 元昭
能 魚 佐藤 秀雄 河村 丘造
能 魚 柴田 収武

六、一八 第三回觀世会 正午 於能楽殿

七 騎落 武田太加志
能 西行 大槻 十三
能 融 觀世 喜之

六、二五 第二回寶生定式能 午後一時

桜 井上松次郎 佐藤卯三郎 河村 丘造
能 熊 川 辰巳 孝 於能楽殿
能 熊 坂 宝生 英雄 佐藤 秀雄 大野 弘之

七、二 龍吟 会午前九時於能楽殿

花月 後藤 淑子
能 経 政 内藤 純子
能 杭 井上松次郎 井上 祐一

七、一六 故岡谷正男氏追善能 午後一時於能楽殿

反魂香 伊藤 祐茲
能 和 岡谷 實山
能 車ノ段 植村真太郎
能 海 内藤 泰二

胡蝶 大塚 一二
狂言 宗 論 河村 丘造 歌村彦四郎
能 藤 戸 本田 秀男

八、六 能樂協会名古屋支部結成 十五年記念大衆能 午後三時 於県文化会館

加茂 辰巳 孝
能 班 大塚 一二
能 瓜 内藤 泰二
能 瓜 井上松次郎 河村 丘造

八、二七 たなびき会練成囃子会

紅葉狩 柴田初太郎

名古屋和泉会々員募集

名古屋は和泉流狂言の発祥の地であり、今回宗家和泉保之氏の後援と名古屋の狂言を保護育成する目的で、徳川義親氏を会長に諸名士の御協力を得て名古屋和泉会を結成、その第一回公演会を十一月十八日に催します。御同好の志の御入会をお願い致します。

名古屋和泉会々員募集

正会員(年額) 三〇〇円 賛助会員 五〇〇円
維持会員 一、〇〇〇円
申込所 千種区内山町三ノ四一 歌村方 電話七三三四〇四六

狂言小舞小謡の稽古開始

特別教室として宗家和泉保之氏の出張稽古を開始しました。
期日 毎月第一月曜・木曜
時間 午後二時―四時、六時―八時
稽古場 中区門前町一 阿弥陀寺
(矢場町百メートル道路本町 通西、南側)

「古文書散見」 佐藤秀雄

七騎落 狂言応答に付 船 出入ノ事
 イツノ頃よりか 彼是 ムツカシク
 先 近年 江戸表ニテモ 手前ニテモ
 狂言方 後見ノ者 出入 イタシ 相
 濟 来リ候へ共 能ニツキタルコトヲ
 狂言方 後見 イタス事 心得ヌ事故
 文化五辰年二月 掃部頭様ニテ七騎落
 仰付ラレ 其節 相改メ 狂言方ヨリ
 船出入ノ事 難致 其趣意 太夫へ掛
 合 以後 左様ノ事ハ 皆 太夫方
 後見 出入 致管ニ相成 其節ハ 大
 夫方ヨリ出入 致 相勤 其後ニハ 左
 様ノ能モ無シ 然所 此度 文化八年
 未十月十一日 大野宅ニテ 仲間稽古
 能ニ七騎落有テ 船出入 大夫方ヨ
 リ致趣ニ申合 相勤ガ 先方モ橋掛
 居モ有マジク又仲昔ヨリ道成寺 宝生
 流ニテハ 狂言方 後見 鐘出入 致
 来タル事 悦ニ中昔ノ書物ニ有シ事
 其上此度 三ヶ日 御能ニ道成寺 有
 テ 狂言方 後見 鐘出入致タル事
 間モナシ 七騎落 船出入 狂言方ヨ
 リ セストイハバ 道成寺モ 同様ノ
 事ナレバ 是モ以後 狂言方ヨリ出入
 セスト スル物カ 如何可致哉ト 又
 又相談アリ 色々ト 説申出 辰年相
 改候趣ニ弥スルカ 又ハ江戸表ノゴト
 ク 狂言方ヨリスル方ガ 無異ニテ有
 カト 善悪説付カズ イツレニモ 私
 ニハ 居 付兼候故 夫ヨリ 家芸
 御祖命様ニ元貞大人 被伺候処 狂言
 方ヨリ 出入 致方 吉トノ御告ニ付
 弥 又此度相改 近年之通 狂言方ヨ
 リ 出入致管ニ居リ付 狂言方ヨリ
 出入致 相勤 尤 狂言方ヨリ 出入
 致上ハ トカク アルマシキ事ナレバ
 一向 其沙汰ナシニ相勤ル
 飛び立斗りに思ひ手の別ぞ哀なりけ

ト謡ス ト 一セイニナル 右謡 ス
 ムト 直ニ 狂言方 後見 本幕ニテ
 船 持出 橋掛 一ノ松ノ所ニ 置
 左ノ方へ出 切戸口 入 右船ノ 置
 様 橋掛 真中ニ置テハ 悪ク 前側
 へヨセ 置ベキ物也 其子細ハ 脇
 後ヨリ 船ニノル故 真中ニテハ 後
 側ニツカヘ 船ニ ノリガタキニヨツ
 テ也 是 心得テ居事也 櫂竿去 応
 答ノ者 自身ニ持サゲテ 脇ニ付出ル
 ガ吉 船ニノリ 一セイ 謡所 都合
 能 出ル趣意モ ヨキ也 扱 船入時
 ハ 後見ニ サスハ悪ク 応答ノ者
 自身ニ 櫂サヲ 弓矢共 船ノ持添
 持入ルガ吉 右持入所ハ 其時 実平
 あされつゝ ゆめかうつゝか ト云所
 ニテ本幕ニテ持入ルガ吉 夫迄ハ片ヒ
 ザ付 見合居ルガ吉 尤 船持入時ハ
 トモノ方 先ヘシテ 持入テ吉 以後
 道成寺始七騎落俊寛唐船ノ類 作り物
 出入 狂言方ヨリ致管ニ相改ル 其内
 俊寛唐船ノ船出入 自身ニスルカ 後
 見ニサスカノサカヒハ 其能ノ 都合
 ヨク心得 首尾 ヨロシキ様ニスベシ
 未トクト合点 イタサズ 其内唐船ハ
 出入共ニ後見ニサス方ヨロシキ様也
 此度安田金三郎ニ承リ候ハバ 江戸表
 ニテモ狂言ニ流共ニ右能三番 船出入
 共狂言方ヨリ致由 文化五辰年改候説
 モヨク心得テ居事也 併又々此度相改
 先年ノ説トハチガヒ 又々狂言方ヨリ
 船出入スル管ニ相改ル 先年ノ太夫ハ
 観世流木下正三郎 此度ノ太夫ハ宝生
 流大野彦三郎也……

右は文献中より発見したもので未詳の
 点もありますが、当時の狂言応答の様
 子がよく解るとの都合、申合せによつ
 て度々変更のあつた事が判明します。
 演能の少ないもの程こうした研究

文獻が発見され易いと云う事も考えら
 れます。

能 仙田雪山子

未開のころ人間の想像力は神を想像
 することに始まつて人間の悲愴の情は
 神へ舞踊の表現で訴えられて来まし
 た。仮面のはじめは未開人の舞踊の意
 味や性格づける方法を扮色すること
 始まりました。人間の想像力の発展は
 過去を現在におきかえることも感情の
 頂点を整理して演技で意志を伝えるこ
 とも知りました。

最も立派な芸術は最も秀れた想像に
 決定されています。想像の芸術、芸術
 の想像とも考えられる能は六百年の昔
 をそのままに今も演能されています。
 平安中期の貴族は民俗文化の多くを
 確立したが庶民のうちから能という芸
 術が創作されました。

多くの文化芸術は宗教との関係に於
 いて生じたといわれていますが、仏教
 との関係に於ての能の起源は欽明七年
 仏教が中国から伝わつた時以來仏教の
 行事として使用されて来たものであり
 行道、伎楽、舞樂の面が正倉院に現存
 されております。また神との関係に就
 いては山間未開の土地に今も郷土芸術
 として伝わつています。聖徳太子のこ
 ろ散樂といふものが雅樂と一緒に、こ
 れも中国から伝来してきました。散樂
 は曲芸のようなもので正倉院の彈弓な
 どにその様は描かれてあります。これは
 雅樂の合間に演じられたものでした。

この散樂は延暦元年（七八三年）廢
 止され雅樂は宮中武樂として今日に伝
 わつていますが散樂の人々は呪師や猿
 樂師として流転の樂人芸人となつて四
 方に散り、神仏祭祀の余興などに雇わ
 れたり、河原大道で芸への投げ銭に生
 きる底辺の民として生きて生きて

ていましたが、二百年近い仏教によつ
 て養われて来た散樂人のうちには学識
 をもつた人のいたことは想像されま
 す。

少数であつたであろうが学識をもつ
 た散樂人達のうちには源氏物語や枕の
 草紙、蜻蛉日記、宇津保などの文学か
 ら取材した猿樂を賤民である立場か
 ら、一日だけ位をもうろうて貴族階級に
 演技して賞讃をうけたこともありまし
 た。

能の始祖、観阿弥は学識もあり天才
 家だつた事は当時の芸道にはもつとも
 くわしく、うるさい田楽舞の保護者で
 あつた、さむらい佐々木道誓が才能を
 買つていたことです。

猿樂は田楽に対抗してあちらこちら
 とさかんに演じられていましたが、大
 和猿樂がそのうちで最も有名で外山（
 宝生）金春（えんまい）板戸（金剛）
 など三坐があり、観阿弥の結崎座とは
 群をぬいていて世阿弥と連れて京に出
 て来て応安七年今熊野演能を機会に世
 阿弥と最高の権力者足利義満の保護を
 受けることになつたことが観世能の大
 成のはじまりです。

義満という人は金閣寺創建の評判だ
 けで人間性はおかれています。観世父子
 の天性を発見しておしみなく援助を与
 え大道芸人芸を民俗芸術最高のゆるぎ
 もないものに育てたことは或る意味で
 は文化の功業者でしょう。併し雅樂の
 宮中武樂に対しての反撥は將軍家武樂
 をつくることに能を育てたとも考えら
 れます。それからこれにならつて徳川
 期に至るまで、金春、金剛、宝生、観
 世、喜多などの五流がそれぞれ権力大
 名などに抱えられて庶民の猿樂にはじ
 まつた演能はまつたく、実力権力者の
 ものとされてしまつたことが今日能が
 感覚として民衆のものでないように思

われて来ているのです。

能が学問や智恵だけの皮相さでできたと考へられませんか。観阿弥が野天に猿楽去をもつていた頃は南北朝貴族の間は対立して豪族武士は権力争奪の動乱はくりかえされ多くの民衆はあらゆるものを戦火に失つて希望のない苦しみに身をさらして捨て鉢のうつぶんの生きかたをしていて、田楽、猿楽、傀儡子、咒師、白拍子、琵琶法師、踏歌など大道に流れる楽人、芸人、歌うたいなど最低の民俗プロックは権力への抵抗を風刺に笑いまがらし野卑な野次などに手を打つて打興じていたので、貴族の支配権力の縛縛から人間への自覚の一步だった時とも考へられ、いずれにしても生存生活の限界にあつた、さまざまの赤裸からの人間性を観阿弥は、無常、因果、狂乱、衰え、恐怖などに写実したことは後に能の神、修羅、女、物狂の五番能の内容にうかがわれます。

演技としては白拍子の鼓舞いからの律動が曲舞となつて演能には必ず曲舞が組まれていきます。いろいろ演技のうえから能は田楽舞が多くとり入れられたとされています。

名人に二代なしとゆうことですが子の世阿弥は父におとらぬ才能の素質をもつていて美少年だったことなどから義満に一番可愛がられ、義満から学問上のことから情操のこと、たんなる芸人から立派な人間として育てあげられたことが芸術能への基盤となりまし。観阿弥も義満も世を去つたから左渡流罪の不運な転変もあつたが芸へのあくなき執念は花鏡、音曲声出口伝、能作書、風姿花伝など芸術論としても立派なものだといわれ、養子金春禅竹に秘伝として伝え今日二十四代にわたつて家元として伝わり、二百四五十番

の演能。そのまま踏襲されています。金春の竹は一休和尚や一条兼良など一流の文人墨客と交際のあつた人だつたと伝えられていて演能が総合芸術としての完璧は他面この禅竹によつて完結されたとしています。

偉大な芸術は一朝にして成らないことをつくづく考へられます。能が幽玄だ中間表情だといろいろに解釈され、静思に誘うものとするれば狂言はあくまで庶民的対人の関係を風刺して面白おかしく動的演技であり間にはさんで演出を観る芸術としての効果を考へたことは演能を識るとすれば狂言も加えなければならぬことになりま。この狂言も、もとは猿楽の人達のものであり、当時庶民の間に受けた演技や内容をもそのまま大蔵流、和泉流の家元芸に伝わり、能の貴族的風格を望むより、庶民の風格で通されてきました。桃山期のお国歌舞伎に模倣を与え後世庶民歌舞伎の黄金全盛は狂言の影響ともされています。狂言は今もみぶ狂言など当時のそのままが演じられていますが、大蔵、和泉の狂言は能と合せて演じる関係から無駄ははぶかれ整理され秩序だてられ芸術的に仕上げられていることです。芸術のすべてのよりよき達成は空間をいかにきびしく処理するかにあります。音楽にしろ、文学にしろ、絵画彫刻も大成されたものとおなじく、演能は芸術として心憎きまで完成されています。一応ここで筆をおき「面作り」「装束」「道具」「お囃子」などについては稿を改めてと思います。(能と狂言の絵の会画家)

狂言周辺

野村広二

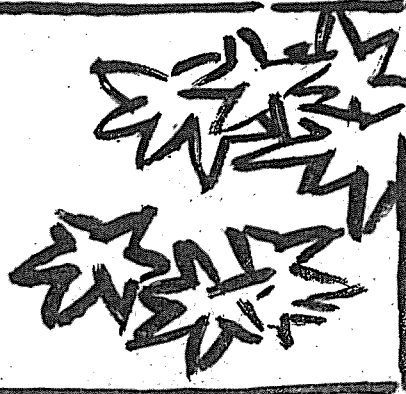
熱田さんの五月は「花のとう」でにぎあう。丁度週末、よく晴れたひる下

りりから出かける。かきりに、きよめ餅の店で一服する。には、あかいもみじの見事なのが縁にまじつて、今年もひとときわあざやか。こんな日に能一番、狂言一番、野外であつたら、楽しみだが、六月の大祭のときにあることだからまあ、それにしても奈良の薪能は今年から三月の五月になるし、伊勢は四月に、すると六月の方がよいのかな、野外は六月は雨期なのでどうであろうなど、もみじをみて何とはなしに考へる。

話は少しさかのぼつて、四月二十九日京都へ行つた。当日は東本願寺で、大遠忌法要に当り、五十年に一回の式能がおこなわれた。この法楽能は十時からはじまつた。早い目に着いて、まづいつものように六角堂へまわる。朝の光の中に線香の煙がまつすぐ立ちのぼる。もつてきた米を紙袋から出す音で、もう鳩が足下に集る。みなやつてしまつてから、一羽「クク、クク」と小鳩が肩にとまつてしきりに餌をねだる。そつと下ろして、時刻よろしと本願寺に向う。式台を上つて随分と長く廊下を渡り、やつと白書院に入る。眺望がひらけ、はるか向うに舞台がある。右と左には木立の青が目もさめるよう。書院と舞台の間も見物席である。つつましい中にどこかはれやかなふんい気、やわらかな気分にかきそわれる。やがて書院からお能奉行がまつすぐ見物席を横切つて舞台上に上り、橋掛までつとすすみ、「はじめませ」と幕内に声をかける。翁を演ずる金剛太夫巖君の登場である。まず一礼。笛。「とうとうたりり」がおごそかにつたわる。気品あり、和かで、やさしい翁である。千歳(茂山正義)がたち、そして翁が折る。退出のあと、お能奉行が再び舞台上に上れば、「狂言はじめ」

司子楽
請茶老名

一町和申中
(28) 五七六九



の声で、「松竹風流」のツルとカメ（大蔵弥太郎）があらわれる。そして三番叟（茂山千五郎）。次が「蒿砂」。ワキの高安滋郎氏が正先に出て、まづ礼。いよいよ開口。「それみほとけのおしえ、さまさまありとはいへど、まづだいのほんぶみよのやみやまよいしとき、そしてしようにあらわれまよして、ただあみだぶつ（不明）の（不明）にきえしまつれとしめたまのしりのみづ、とおくながれてももせを、七たびかえりねんぶつと、やまとしまねにあふれつと、あおうなばらなみじはるけきとつくにまでもおよぶなり、云々」とまことに淀みなく朗々として重々しく、胸の底につたわつてくる。立派にめでたくつとめおわる。期せずして拍手がわく。あと脇狂言「三本柱」（茂山七五三）。時間で三時間十分。日が真上から照る頃となる。そして「親鸞」の上演。このときを記念に初演、作者土岐善磨氏、節付、演者喜多実氏。土岐先生は年来親鸞、蓮如、願如三部作の演能が念願である由、恵信尼がシテ。都の僧が常陸國稲田の里につくと田植時、そこへ一人女性があらわれる。彼女は恵信尼であると告げ下妻の「夢想」を語つて消える。後半「述懐」を伝え、「六角堂の夢想」を告げ、舞となるというの筋。最後に、親鸞聖人その人を二重写しにする点、第一作の「願如」、「青衣の女人」と趣を大いに異にしていく。くわしくは後日にゆづるとして、間狂言が秀逸である。田楽法師（茂山七五三、千之丞）がいでたちもはなやかに、聖人のことを語り、和讃を唱えよとすすめ、「なむあみだぶつとこのうれば」といよいよ佳境に入つていく。楽しい間狂言であつた。はじめのツレ（女）の田植の動き、「念仏とな

えて地獄におつるとも」、舞台中央で「他力本願真宗の」とうたうあたり特に印象的、そして「あけぼの空を仰ぐ」で余情をのこしておることになる。「他力」のことを知らない私には、語本をよむとかえつてわからぬ意味の深いものがある。みていて、ほかの能とくらべず、イエスとマグダラのマリヤ、またアナトール、フランスの小説にある、一代の遊女しかも教養深い女が回心をするのとはどうだろうなどおもつたりした。もう一度みてみたい。この頃からくり出しついに雨となる。雨中しばらく、「住吉詣」（巖）が永謙君と親子の出動でおこなわれていく。「住吉詣」はこういふところでもみる能のようだ。雨の上る頃、茂山弥五郎翁とおなじく二度の勤めの田鍋惣太郎氏着到。元氣なお顔である。こうして観能はおわつた。これについて、五月五日の朝日狂言会は三回目を迎え、なかなか盛況。狂言のよさが、「芸どころ」の空名をいつまでも胸にだきしめ、温古知新、そして新風をいれない土地の芸能山脈に少しづつのおいを与えはじめてきたようだ。会そのものは、次回あたりが運営のむつかしいところであろう。ほかに、最近現代教養文庫版で「仮面の美」（金子良運著）という本が出た。是非一読をおすすめしたい。七、八月にも記念すべき能があるとのこと。期待されることが大きい。

新入会員紹介
 金剛流 片野東四郎
 同 片岡道子
 おひらきのお知らせ
 篠田 正蔵氏 藤子小敷披
 中村 正徳氏 藤子小敷披
 浅野 静子さん 初能
 梶田 俊氏 藤子小敷披
 安藤 正徳氏 藤子小敷披
 石井 賢さん 藤子小敷披
 藤子小敷披 藤子小敷披
 藤子小敷披 藤子小敷披
 藤子小敷披 藤子小敷披
 藤子小敷披 藤子小敷披
 藤子小敷披 藤子小敷披
 藤子小敷披 藤子小敷披

暑 中 お 伺

一 河村 謡二 會	石 西尾 井孫 勝太 會	博 勝 會	藤 加藤 門良 會	長 鬼頭 生八 會	竜 田六郎 吟兵衛 會	霞 田鍋 水惣 會	潤 林 水願 會	観 野崎 水太 會	観 久田 正秀 會	高 高安 安滋 會	た 高安 なび びき 會	名古 田鍋 屋能 惣太 樂鑑 太郎 賞會	名古 田鍋 屋能 惣太 樂鑑 太郎 賞會	名古 田鍋 屋能 惣太 樂鑑 太郎 賞會
--------------------	--------------------------	-------------	--------------------	--------------------	----------------------	--------------------	-------------------	--------------------	--------------------	--------------------	--------------------------	--	--	--

風韻會	幸友會	金剛流松風社	掬水會	曲水會	金竜會	春鶯會	正樂會	松謡會	祥雲會	清風會	掬水青陽會	能楽協 會 支部長 田鍋 惣太 郎	名古 屋和 泉會	狂言共 同社
-----	-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-------	----------------------------------	----------------	-----------

狂言

狂言人語

歌村彦四郎

能楽協会名古屋支部

十五周年記念普及能

去る八月六日愛知文化講堂に於開催金剛流の「邯鄲」宝生流の「班女」觀世流の「紅葉狩」狂言は「瓜盗人」他に宝生家元、觀世喜之氏、本田秀男氏、辰巳孝氏等の舞囃子の賛助出演があり大に錦上華を添へた感じでした。暑さにかゝらず満員の盛況で主催者側としても大いに感激いたしております。

○名古屋和泉会第一回公演

徳川義親氏を会長として諸名士の賛助を得て、狂言和泉流の宗家泉保之氏の後援と名古屋に由諸ある狂言の育成を計る目的で結成中のところ、愈々来る十一月十八日第一回の公演を開くことになりました。どうぞ一員として御大会をたのみます。

○三宅藤九郎還暦祝賀狂言会

和泉流の元老三宅藤九郎氏本年還暦のため来る十月二十一日東京和泉会の主催にて觀世会館に開催、実兄万蔵氏をはじめ、大藏流の長老弥五郎氏同家元弥太郎氏も参加せられる予定にて、定めし盛況のことゝたのしみにしております。

○秋の芸術祭に狂言のみ参加

本年の文部省主催の第十六回芸術祭公演については曲折の結果本年は能を取りやめ、狂言のみが二日三回の公演を催すことゝなつたよし。

11月18日(土) 午後4時始
熱田神宮 能楽殿 (36年度名古屋市民芸術祭参加)

(狂言)名古屋和泉会第一回公演

主催 名古屋和泉会 狂言共同社
後援 名古屋市教育委員会 能楽協会名古屋支部

昭和36年9月1日発行
発行所
名古屋市中区興門前町5/2
井上重兵衛方 電01430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社 地上社 電01100

九月の能

九、三 世阿彌祭乱能 支部主催 后一時
竹生島 鬼頭 八郎 野崎 高安 滋太郎
萩大名 前田六郎兵衛 西尾孫太郎
乱 田鍋惣太郎 増田惣一郎
くさびら 塚本 秀雄 加藤 惣兵衛
藤井啓次郎 寛真 石林 加藤 三男
九、〇 故梅若実追善能 名古屋梅若会 后一時
通小町 梅若 雅俊 梅若 泰之
江口 梅若 六郎 西村 弘敬
組口 野村 又三郎 河村 丘造
主 野村 又三郎 高安 滋郎
九、一七 名古屋観世会 素詔会 正午
九、二三 名古屋巽会 正午
竹生島 岩田 圭代
敦盛 高田 秀雄
井筒 佐藤 和雄
藤戸 戸田 義雄
石橋 辰村 義孝
不須 井上 祐一
九、二四 松詔会 井上 松次郎
安達原 佐藤 太俊
盆山 河村 丘造 佐藤 秀雄

九月の狂言解説

繩ない(なわない)

歌村彦四郎

ばくちの好きな主人のため、隣屋敷へ奉公に出された太郎冠者、テコでも動かぬと不貞くされる。相手の主人は約束が違ふと戻します、主人に細をなへと云いつけられ、神妙に細の端を主人に持たせて細をないながら、隣りの内緒の話を面白おかしく語り、つい身が入りすぎてうしろの人が隣の主人と入れ替つこと知らず、仕方なしで振り上げたてぶしの始末は……

不須(ぎす)

不須とは「附子」とも書く、とりかぶとから造つた毒薬の名たと云ふ。留守を仰せつかつた太郎冠者、次郎冠者、大荷物ちやと預つたものが砂糖であることを発見。うまいうまいと兩人して喰べて終ふ。さてその後始末は：「二口くえども死なれませず、二口喰へどもまだ死なず、三口、四口、五口六口、十口あまりみななるまで喰ふたれども、死なれぬことの出度きよなんぼう頑固(かしらがた)の命かなと語り逃げ去ります。

盆山(ぼんざん)

盆山(盆裁)の好きな男、どうしてもほしい盆山を断りなしに借りて来よう、有徳な人の家に忍び込みます。ところがその主人に見つかつて盆山のかげにかくれますが、盗人を知人と知つた主人は、いろいろとからかひます。うち、あれは鯛ぢやと云われてひれの代りに扇を立て、ひれに見せたまではよかつたが、鳴けと云われてさあ大変、何と鳴きましょうぞ。

狂言会によせる

佐藤 秀雄

朝日狂言会、白木狂言会、狂言教室等いろいろ狂言の催が増えて斯界の為御同慶にたえませんが十年一日の如く其曲目の撰定に當つては、よく出るものが毎年々々くり返さし、演出されるのみで、之といつて変化がみられないのは残念に思います。これから後進奨励の意味でも何か目新しい企画が望まれます。例えは困難な事かもしれませんが同一曲目を流儀で競演するとか、或は他流に無いものを同一舞台で並べて見るとか、日舞で演ぜられる狂言形式のものとか本来のものを並べて演ずるとか、その形態は種々あつても、何が有意義

な研究的な目標を表現出来る会が一つ位出来てもよいのではあるまいか。昭和十三年版狂言三百番集に掲載されている共通していない狂言曲目として各流独自の曲目が左の通り列記されている。

和泉流のみにある曲(大藏流になし) 岩橋、六人僧、張蛸、博奕十王、北条種、野老、鈍掘草、東西離、茶子味梅竹生嶋詣、児流鑄馬、塗付、御冷、折紙舞、若菜、若和布、勝栗、隠狸、金岡、柑子、歌仙、雁大名、角水舞、柑子儀、大般若、太子手鉢、太鼓負、宝笠、竹ノ子、樽舞、連尺、連歌十徳、筒竹筒、杭か人か、口真似、懐中舞、瘦松、松囃子、孫舞、鉢叩、毘布柿、小傘、合柿、三人夫、賽ノ目、咲嘩、禁野、雪打、弓矢、水汲、柱杖、人馬、毘沙門連歌、樋ノ酒、引括、引敷舞、餅酒、蟬、双六、三人長者 となっており、この他家元山脇方及野村派になくて三宅派に別物として、鬼丸、見物左工門、孝心竹、祖父儀、呼声、出家獵人、唐人子宝、俄山立、茶奥座頭、宝齋取、宝舞、等二十五番山脇方野村派のみの曲として、右流左止、姫糊、空腹、越後舞、鮎浦島の六番が所載されてある。又、大藏流のみにある曲として、金藤左工門、鶏猫の二番が記されてある。

同一曲目でも流儀によつて曲名の異なるものもあり例えば、和泉流の今神明が大藏では栗隈神明となり、歌争が土筆となり不見不聞が、不聞座頭と、菊の花が茫々頭となる等である。同じ一番の狂言でも演者の解釈と演出によつて味が變つて来るのは当然であるが、この本来の曲種を見抜いて之に適切な演出を心がけることが一番大切だと思ふ。各流それぞれに研究して之を同一舞台で競演しそれぞれの演出についての意見交換をして斯道の発展と伝統の維持に全力を挙げたいものである。

狂言周辺

野村広二

早いもので、七、八月もすぎ、九月に入ろうとしている。杏竹桃やサルスベリが咲き、紅蜀葵がひらき、もう芙蓉がさき出して来た。今年にはホコリの多い日中の街と月のない夜のつづいた夏、八月も中旬になつてやつと月が出、明るい夜を迎えるようになった。この夏は煎茶一点張り。コーヒーも、紅茶も、好きな酒もほとんどやらず、あの甘苦の味にさわやかさとすがすがしさを求めるのに汲々としたようであつた。

例年のように、暑い季節にも演能があつた。岡谷追善会、大衆能、人を集めてにぎやか。テレビで操り人形の「玉藻前」をみる。最後の那須野の雪の場面が詩情豊かであつた。能、狂言では万三郎の「天鼓」、金剛殿の「土蜘蛛、千筋ノ伝」、山本東次郎の「悪坊」が見ええがした。ラジオでは一中節で「石和川」をさいたいお盆の故人をしのぶ時間には、川崎九淵老と森重朗の両氏、川崎老は「関寺小町」の大鼓、森氏はワキの語りをきかせてもらつた(どれもNHK)。また絵では森緑翠氏の「黄蜀葵」に何か能の幽玄にかよものものがあつたし、わが師事する谷川徹三氏の講演「芸術の運命」一円空の彫刻を縁に「がきけたことはとてもうれしかつた。本のことだが、余り長くなるので次回にしたい。

八月六日の大衆能は能楽協会名古屋支部十五周年記念の行事。戦後、名宝劇場でいち早くおこなわれた能、狂言という古典芸能復興大衆能から十五年たつたが、演能の趣旨こそちがえ、あわせ考える感慨つきぬものがある(在の茂山千作翁と井上重兵衛氏

はすでに他界)。その間いろいろのことがあつたが、能楽堂の再建と無形文化財指定の二つは思い出深い出来事であつた。一方は好事、他方は寝覚のわるい能界の記録だつたが、しかし後事には名古屋の能界は寛容であつた。当日は「班安」も演ぜられた。能三番に狂言一番。「班女」には気品高いが何か欠けていたと述べたが、後日シテのN氏に会い、こわれるまま、親しいまに語つた。力がこもつていたし、男女の仲を純愛で演出のねらいでしたが、情事の方はなおざりでした。清潔な「班女」、そういう演出も勿論あつてもよいとおもいますが、もう少しふつくらとした美しさがほしいとおもいます。中途で天女やあどけない女のすがたがあらわれませんでした。一体能には、狂言すら、終始すがすがしさがともない、清潔感がついてまわる。女の美しさや、人事のもつれを目や耳でなめまわし、あくどく追うということ、は、もう今ではない。「松風」と清元の「松風村雨」とくらべてもわかることだし、狂言の「右近左近」(おこさこ)にしてもそうである。ほかの文芸の包蔵するものともちがうし、能、狂言だけがもつているふんい気である。このすがすがしさを求めて能楽堂へ集る人も多いにちがいない。

八月下旬、「円空展」をみる。その柔かさときびしさにまづ打たれた。大般若経の前につけられた、各巻の説明の墨折に、頭に浮ぶ、いや手の先にてきる造形の秘密の裏付を、基本のかたちを、目の前にみたとおもつた。それと口のほり工合。「円空の微笑」ともいふべき(すでに誰がいつているかも知れぬが)複雑さ)つ口の開き方

に、能面に通ずる不可思議があつた。もう一つ、「木端仏」の前に立つ。大きな像をきざんだ節のうすい破片に、ちよつちよつと、口ではないやすが、五つ、四つ刻みをいれる。もうそれが仏の顔になる。これは即身成仏、悪人もすぐわれるという仏理を正に直指するようであつた。なぜか「なりきる」といつた能芸理論を暗示するようにおもわれてならなかつた。あのですがすがしきも、このなりきることも、狂言や能では、まづ身につけることで、終身これに苦勞しなくてはならない二事であらう。

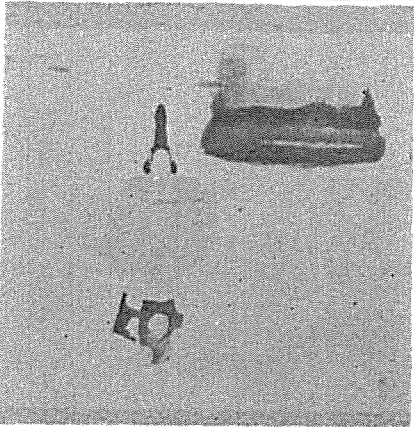
秋は、九月三日、世阿弥祭記念乱能ではじまる。いろいろの意味で楽しい一日とならう。

十月の予告

- 一〇、一 鬼頭八郎還曆祝賀能
- 枕慈童 鈴木千恵子
- 三舟輪 岡田 頼充
- 福舟慶 水藤 又吉
- 福の神 井上松次郎
- 一〇、八 能楽俱樂部
- 一〇、一五 掬水青陽会
- 通小町 加藤丈太郎
- 千手 久田 秀雄
- 鉄輪 上田 照也
- 蛸 佐藤 秀雄
- 一〇、二二 名匠鑑賞能
- 雲林院 梅若 六郎
- 熊坂 本田 秀男
- 文藏 観世 喜之
- 一〇、二八 潤水会
- 一〇、二九 宝生会十五周年
- 宗家還曆祝賀能
- 羽衣 辰巳 孝
- 驚尊 宝生 九郎
- 正尊 宝生 英雄
- 素袍落 野口 録久
- 河村 丘造

道成寺

仙田雪山子



仙寺の建立は権威の象徴として政治の中心とされてきた、奈良期の藤原氏は地方にまで豪華美麗な藤原氏寺の建立を見たのである。

紀伊日高郡の道成寺は藤原不比の養女宮子姫産土いわれの土地とされ、道成卿が命を受けて大宝七〇一年文武天皇勅願寺として義淵僧正によつて建立したとなつてゐる、本尊は千手観音で七堂伽藍がそろう、二十七坊を控え、寺領百九十余町の広大な地を有し僧兵も多くいたとして熊野参りの往來に金蓋さん然として輝いていたのが、歴史はめぐり群雄の抬頭によつて檀那藤原氏も衰退して寺領もいつか没収され、寺宝も掠奪して堂宇も風雨のため荒れるにまかせた、現在ある巨大な仏像は葉師寺や興福寺の仏像と風格は等しく創建時のものにまぎれも無いが、荒廢のさまは仏像の損傷からうかがわれるのである。郷土民の信仰と法燈の護りによつて本尊、四天王、脇立仏など十余体は危く残されたが鐘は失つたまま伝説にのみ残されてゐる。

伝説のすべては想像の域を脱しないものが多く道成寺の安珍清姫情炎鐘巻の伝説も想定の外は無いのである、平安後期は庶民の自覚が騒然と社会の表面に出て混亂と暗黒におゝられた時期であつて、足利の世となつて暗雲のやゝはれるのを見て、荒廢をつゞけた仏寺の復興が企てられることは当然であつた、抽象を現実化する学識に鍛えられた僧侶の智慧が教典を広げ宗派興隆の爲に、嘘も方便と考えられ無からの伝説を創作してのお伽草子の説教に社会にのぞむことは罪惡視する必要もなく道成寺縁起清姫安珍の恋を扱つた伝説の真偽も、素直にそれなりの価値として見られるのである。鎌倉期から室町期にかけて仏寺縁起繪巻は旺盛な発展を遂げていた時代であつて、仏寺縁起は二十数巻六十巻に及び、高僧伝三十五種二百五十五巻の多きを数えることが出来たのである。凡その仏寺関係の繪巻は天皇の詞書をもち高位貴頭の奥書のものがあり、道成寺縁起繪巻は繪として稚拙で秀作の位置はもたないが(義満期一三九二年)後小松天皇の詞書とされ(一五五九)義昭拝騰花押が附せられ寺領の寄進を受けたと伝えられている。

安珍清姫物語の根拠となつておるものに平安中期の日本法華驗記から出た今昔物語卷十四(紀伊国道成寺僧写法花救蛇語) 鎌倉期元亨釈書など僅かに散見され、安珍清姫の名も現われず伝説の具体性も欠き鎌倉初期高山寺蔵の華嚴縁起の伝記に「新羅国華嚴宗の開祖元曉、義湘大師師のうち義湘が長安で善妙という美女に懸想され、義湘の帰國のあとを追つた、義湘の船の出帆したと知るや、善妙海中に身を投じ大竜となつてその船を守つた」とい

さゝ清姫物語に類例のものが見られるのみである。酒井家蔵の繪巻では安珍は京都清水寺賢学僧となつており、女は二八の姫君となつていて史実の確証は得られないのである、南無妙法蓮華經普門品觀世音菩薩教典に見られる、過去因縁因果、煩惱、毒蛇羅刹女、叩殺、隋教心化菩薩、一切怖悉除、救世功德、と教典説法を俗像にかりて綴られたお伽草子伝説として創作であることは充分合点されるのである。

醍醐天皇の御宇延長六年奥州白河の安珍といえる修験の美僧熊野権現參詣の途紀伊国西牟婁郡真砂の庄司清次に飯宿の夜娘清姫に懸想され「一樹の陰一河の流れ皆先世の深き契りと覚え候」と迫られたが安珍「宿願ありて白雲万里の路を踏み蒼海漫々の波を凌ぎ二三日待ち給え參詣の帰途必ず寄りて」と宥められ清姫「先の世の契りの程を三熊野の神しるべきもなかるべき」と別れを惜しんで歌をおくれば、安珍「三熊野の神しるべききくからになにを行末のものしきかな」と返歌して一時逃れの偽りで去るに清姫恋慕の情に耐えかねて安珍を往來に求めるに、そのものらしき者先に行けると告げられたらば清姫激怒して安珍を追い求め原井戸の里にて追いつき深く責むるに安珍熊野権現この難助け給えと祈願すれば、清姫法力に打伏、安珍今ぞと駆け逃れ日高川にいたり「異形の女追て来るべし定めてこの舟に乗らんと言わんも乗せ給うな」と頼み置き道成寺に駆け込み、僧の機転にて究竟のところと釣鐘のうちに匿されたが蛇身に変じて日高川も一気に泳ぎ渡り火焰を吐いて道成寺の石段を駆け登り、鐘を毒蛇羅刹の身に纏い捲き鐘諸共焼殺し、その身は

入江に投じ果て「二匹の蛇に結ばれて畜生界に墮ちて成仏出来ず一乗妙法に供養し給え然らば吾れ菩提を証し得脱を得られんこと疑いなし」と老僧の夢に現われ、老僧不憫に思い妙法蓮華經八巻を書写して法要を嚴修した、その功德により忽ち蛇道をはなれ解脱して天上界に甦生したと語つてゐるのが概要である。

文学的批判の対象としては他愛ないものようであるが、演能的転統の効果に於て脚本的であり極めて秀れたものとしての真価を発見するのである、この当時天台宗に台、禪、儒の学識に知られた玄慧法師という名僧がいて今日演ぜられる狂言の脚本の数十番はこの僧の脚本だと伝えられている。(道成寺) 真言宗のうちにこうした才能の僧侶がいて、道成寺清姫安珍の演劇的な脚本が創作されても当然であるがこの道成寺の極めて演出の効果の巧さは猿楽能時代の観阿弥が脚本に参劃したとも考えられるのである。

清姫に炎した再鐘について道成寺伝説に続ける物語があるが、それは正平十四年三月將軍義詮期、源万寿丸一族によつて失鐘再建の寄進法会に際し女人禁制と告げてあるに拘らず、白拍子実清は清姫の怨靈現われ鐘に近づき呪の舞をまい法会は助けられ不首尾に終つた、鐘は呪の鐘としてながら裏山に捨てられていたが、天正の秀吉期に仙石権兵衛なる武士の手に渡り陣鐘として京に持ち帰られたが鐘音を出さず、妙満寺に奉納され経の功德に怨靈の苦縛は解かれ、妙満寺に今日存鳴しているとい説かれています。

能楽に於ける道成寺演能の構成はこの伝説に着想したものと伝えてゐるが事實は、鑄造未熟の故障に法会も失敗

に終つて鐘は片づけられた単純なこ
 であつたと考えられる、当時密教は女
 御を廻つて怨恨による呪咀祈禱の修法
 も行われて妖気が感覚され、釣鐘には
 女人の鏡が寄進され、密教の法会には女
 人禁制とされ、法会には庸女巫女の拍
 子舞など実在の情況が鐘と女性にから
 まつての妖氣の感覚は演能に對する観
 阿弥の才能と結び創作慾をうながし、
 脚色となつたものようである。

この再鐘寄進の正平十四年は義詮期
 (一三五九) 絵巻の詞書、後小松天皇
 は義満期(一三九二) 絵巻制作に相当
 の日時を要し後小松院に詞書を仰いだ
 としても再鐘期より清姫絵巻が十数年
 は後日のものであることである。

觀世父子今熊野演能義満との關係は
 (一三九九) で信すべきものであり、
 觀阿弥が猿樂能に道成寺へ座をもつた
 ことは演能の乱拍子が道成寺石段に正
 覚したとあることである。

道成寺創建に關する道成郷も能(小
 鍛治)の条には一条天皇(九八六) 期
 の人と説明され道成寺創建文武天皇(一
 六九七) とは三百年の期が錯誤され宮
 子姫の史実も泡沫されて伝説は錯覚さ
 れているのである、恋愛の感覚も数百
 年後にはまた交相するかも知れないの
 である、恋愛も時代の觀念に人情風俗
 表情まで変化し、源氏物語が哀欲の無
 表情が表情とされていた平安貴族であ
 つた時代もある。清姫の恋慕の執念の
 表現は、時代の混乱期の社会のうちの
 恋愛理想の反映の表情であつたとも言
 える、社会という、まことに厄介な現
 実から逃げられない人間である、餓鬼
 六道羅刹の表情をもち換えて清姫情炎
 の怪しい呼吸を感じる慾望は六百余年
 の昔も今も変わらないようである。

俳句

(蛇塚は日高の川の芦原芦のつゞき)
 (筆者は画家)

仙田雪山子、能と狂言の絵の会
 いよいよ好調御申込みを

墨と胡粉と金を基調とした、日本古来
 の運筆の妙を生かし、同じく日本古来
 の芸術を表現せんとするものでありま
 す。

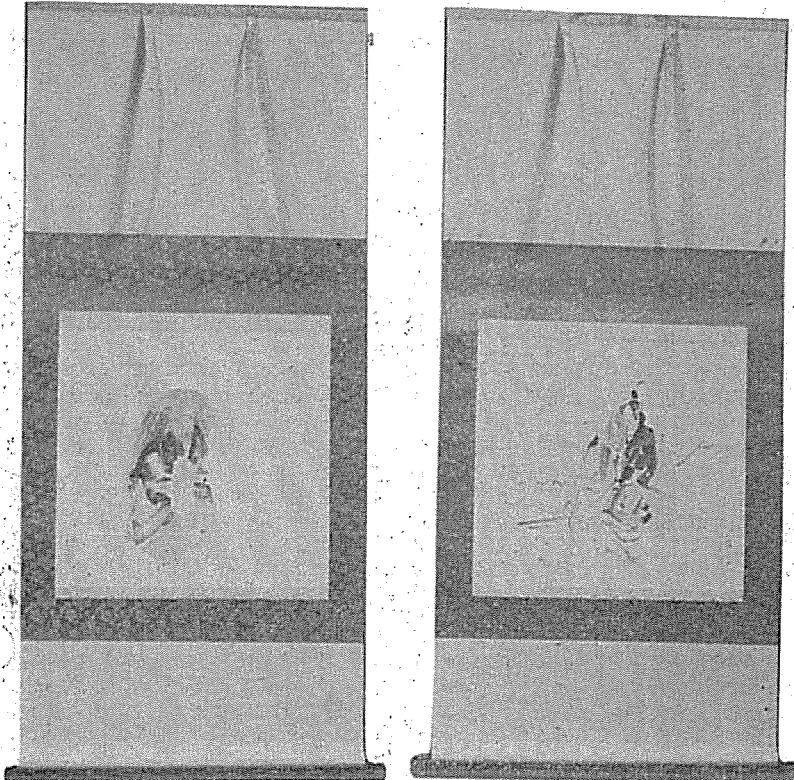
申込所 名古屋市中種区内山町三ノ四一
 歌村方 電七三二四〇四六

おひらき

楽師協議会

- 五、二八 雄風会
- 村川 正一氏 素謡安宅ヒラキ 下田社中
- 七、二 竜吟会
- 北条 朔子氏 ハヤシ館ヒラキ 藤田社中
- 梅木 郁美氏 " " 寛 社中
- 岩附 善吉氏 " " " "
- 伊藤嘉奈子氏 " " " "
- 錦見 静氏 ハヤシ小鼓石橋ヒラキ 田鍋社中
- 須賀千代子氏 ハヤシ狸タシテ 内藤社中
- 八、二七 たなびき会
- 福岡 厚作氏 ハヤシ、シテ 駿島社中

改正価格 表装箱付 四、五〇〇円
 額面付 四、〇〇〇円



能 狸 々

能 井 筒

登録商標

御千代宝

登録商標

城で餅

登録商標

桐壺

中区宝町二丁目

名古屋 龜末広

電話 三四四六
九二五三

狂言

十一月十八日・午後四時始
於 熱田神宮・能楽殿

名古屋市民芸術祭参加

第一回 名古屋和泉会公演

主催 名古屋和泉会 狂言共同社 後援 名古屋市教育委員会 能楽協会名古屋支部

狂

言

業平餅 和泉 保之	隠 狸 野村又三郎	小舞 小山伏 石田 喜樹	鈍太郎 三宅藤九郎 三和宅 右保之	牛盗人 井上松次郎 石田 喜樹	蝸 牛 和泉 保之 三河村 右近	挨拶 番組 名古屋和泉会々々長 徳川義親
野歌井井井井山井石井	村村上上藤上本上田上	又彦 光礼 次之 喜次郎	三和宅 右保之	井上松次郎 石田 喜樹	三河村 右近	

昭和36年10月1日発行
発行所
名古屋市中区裏門前町5ノ2
井上重兵衛方 電話1430
名古屋狂言共同社
印刷所
株式会社 地上社 電話1198

名古屋和泉会

入会のおさそい
今回徳川義親氏を会長に戴き、各有力な方々の御協力を得て結成いたしました。郷土の古典芸術保護育成のために御入会を御願ひ致します。

年一回狂言の公演を催し紹介普及する。
正会員 (一口) 三〇〇円 (招待券 一枚)
賛助会員 (一口) 五〇〇円 (招待券指定席一枚)
維持会員 (一口) 一〇〇〇円 (招待券指定席二枚)

申込所
名古屋和泉会 千種区内山町三ノ四一
歌村方電話④四〇四六
中区裏門前町五ノ二
井上重電話④一四三〇
狂言共同社 昭区和川名本町六ノ完
河村丘造方 電話④四七三
佐藤卯三郎方 守山市小幡翠松園
電話(守山)②一三六
佐藤秀雄方 北区豆田町二ノ五三
(勤務先)電話④三三
熱田神宮能楽殿 電話④二九一二

十月の催能

一〇、一 鬼頭八郎還暦祝賀能
於熱田神宮能楽殿
午前八時 長生会

狂言 福ノ神 佐藤卯三郎 河村 丘造	能 枕慈童 鈴木千恵子 西村 欽也	能 三輪 岡田 頼允 西村 欽也	能 舟弁慶 井上松次郎 高安 滋郎	能 野守 橋岡久馬 廣瀬 三男	能 知章 橋岡文蔵	能 花月 橋岡久馬	能 石橋 觀田武雄	能 老松 柴田初太郎 大槻 秀夫	能 西王母 橋岡久太郎
--------------------	-------------------	------------------	-------------------	-----------------	-----------	-----------	-----------	------------------	-------------

狂言 実盛 大槻 十三	能 白楽天 山本 博之	能 一〇、八 狢猫調会	能 通小町 加藤丈太郎 西村 欽也	能 千手 塚本 秀雄 高安 滋郎	能 娟 久田 秀雄	能 鉄 佐藤 秀雄 河村 丘造	能 輪 上田 照也 石田 喜樹	能 井上松次郎 西村 弘敬
-------------	-------------	-------------	-------------------	------------------	-----------	-----------------	-----------------	---------------

一〇、二 名匠鑑賞能
午前十一時 名古屋能楽鑑賞会
能 雲林院 梅若 六郎 福王茂十郎
能 熊 和泉 保之 高安 滋郎
能 坂 觀世 喜之 福王茂十郎
能 文 藏 和泉 保之 井上松次郎
一〇、二八 潤水会素謡会
一〇、二九 宗家還暦祝賀創立五周年記念
午後一時 名古屋宝生会

能 渡辺 三郎 佐藤 卯三郎	能 吉田 俊彦 西村 欽也	能 戸田 秀雄 西村 欽也	能 辰巳 孝 西村 欽也	能 内藤 寶生 高安 滋郎	能 野口 寶生 高安 滋郎	能 鈴木 義久 高安 滋郎	能 新井 直久 高安 滋郎	能 衣井 良雄 高安 滋郎	能 寺井 良雄 高安 滋郎
----------------	---------------	---------------	--------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------

十月の狂言かいせつ

福の神(ふくのかみ)
毎年気の合った同志で西ノ宮へ参詣します。時分を計らい福はうちく、鬼はそと、豆をはやします。福の神も年ごとの参詣を感のうまし〜て

歌村彦四郎

大笑いで出現されます。「いで、このついでに、たのしうなるよう語りて聞かせむ、朝起きとうして慈悲あるべし、夫婦のなかに腹たつべからず、ひとの来るをも厭うまじ、我等がようなる福天には如何にもお供米を結構して、さて中酒には古酒を、いやといふ程もるならば、楽しんでなさいは叶ふまじ」。

蝸(たこ)

この狂言は能をもつたもので、旅の僧が蝸の幽霊に出逢い、幽霊の訴えによつて後生を吊うことになります。シテ、ワキ、アヒも出てすべて能の形式をとります。

「引すえられて後より、脛丁を押当てらるれば、眼くらみ息詰つて、うつぶきに押伏せられて、づをはいでぞ伏したりける。而して起上れば、或いは四方へはり蝸の、照る日にさらされ、足手を削られ、塩にさされて、隙もなき苦しみを、妙なる御法の庭に出でて、仏果に至る有難きよ、只一声ぞ南無阿弥陀仏、只一声ぞ生蝸とて、かきふくやうにぞ失せにける」。

文蔵(ぶんざう)

許しを得ずに京見物に出た太郎冠者を咎めるつもりで、その私宅を訪れた主人は、太郎冠者が賑やかな都の話をした挙句、伯父の方を訪ね珍らしい物を馳走になつたが、その名を忘れた。主人は何とかその名を知らうとして太郎冠者が源平盛衰記の石橋山合戦に出てくるものと覚えているのをたよりに其の一節を長々と語り出す。よう／＼に真田、俣野の一騎打から、新五、新六の加勢により、ついに真田の首を挙げたところ

へ、乳人親の文蔵が登場する段になり、太郎冠者はハツタと思ひ出しその文蔵を頂戴したと云う。それは禅僧の用いる粥のこと、分り、主人に一喝されて決末となります。狂言中語りもの、出るのは多々ありますが、これは又戦い物語りをさせる珍しい曲で和泉流の若い家元の賢実さを御鑑賞下さい。

「学生と狂言」

佐藤 秀雄

古来の能楽師達は、武士階級の代表者である將軍や大名達の被護により生活の保証をうけ安心してこの芸道に精進し伝統を守つて来た。しかし現代はと云うとこの様な特殊な支援があるわけではなく一般人の愛好者によつてこの芸道の維持を計らねばならないこれ等一般人には大名や將軍のように此能楽保存の責任はないわけで、嫌になればそれ迄、現状維持が出来るか否かは一に楽師達の努力と芸にかゝつて来る訳である。そこでより若き世代即ち学生層への働きかけが必然となる。ところが現代の学生層が最も関心を寄せるのはスポーツ、映画、音楽と時代に即応した流動感と興奮、それにスピードの持つスリル等であり、之に比べて能や狂言のもつ静寂、象徴性等は到底魅力をもたない全然別のものであるのだ。しかし此相對する二つのものも、文化としてはそのいづれも理解し受け入れられなければならないものである。進歩的な躍進する現代文化と共に、伝統を誇る静寂幽玄な歴史ある古典も共に鑑賞されるべきだと云う考えが一部学生の良識によつておこり、能楽師達の運動も加り学生鑑賞能の催会、ひいては学生の自主的参加による、学生能の開演が目ざましく発展の途を辿つて

来たのである。然し乍ら事狂言に關しては矢張り関心は薄く、新作狂言だとか、新劇の人々の寄せられた発声方法に対する検討とか或るかぎられたものに限定され狂言それ自体への情熱が盛り上らないのは狂言と云うものを未完成なものと考えているのではないだろうか。

十一月の予告

- 一、三 霞会・囃子会
- 一、五 観世婦人師範連合会
- 一、二 鳳鳴会
- 一、二 小 督 坂下
- 一、二 卷 網 坂下
- 一、二 栗 佐藤卯三郎 河村 丘造
- 一、一八 狂言、名古屋和泉会第一回公演
- 一、一九 名古屋観世会
- 一、二 高野物狂 山本 博之
- 一、二 葛 城 梅若 六郎
- 一、二 玄 衆 片山 博道
- 一、二 清水座頭 和泉 保之 井上松次郎
- 一、二、二三 掬水会
- 一、二 小 督 植村真太郎
- 一、二 熊 坂 谷野 博
- 一、二 窃盗人 河村 丘造 佐藤卯三郎
- 一、二、二六 清風社

おひらき

楽師協議会

- 八、二〇 幸友会
- 荒川静江氏 翁 小 鼓 福井社中
- 岩本 彩氏 囃子小鼓 //
- 木村敏子氏 //
- 九、二三 巽 会 //
- 大森英三郎氏 竹生高笛ヒラキ 寛社中
- 五、七 掬水会
- 北村勇夫氏 壮若シテヒラキ 柴田社中

舟橋きぬ女

権能の都度楽屋で世話をやいていた舟橋さん、二十三日の巽会を了へてその夜脳溢血で急逝、いさゝか無常を感じ。享年六十三才つゝ、しんで冥福を祈る。合掌

一点にても卸します

營業品目
ダイヤ・貴 金 属
ヒスイ・メキシコパール
眞 珠・装身具全般

製造部 一光商会

昭和区前山町1ノ30 石原時次郎
電 75-3921

販売部 石原商店

昭和区川名本町6ノ39 石原聰一朗
電 75-4735

十一月十八日・午後四時始
於 熱田神宮・能 楽 殿

名古屋市民芸術祭参加 名古屋和泉会

第一回公演

主催 名古屋和泉会 狂言 共同社
後援 名古屋市教育委員会 能楽協会名古屋支部

御 挨拶

和泉保之

名古屋和泉会も地元諸氏の御努力に依つて結成され、第一回公演を迎へるに至り、伝統の強さというものを痛切に感じ、慶びも又一しほであります。伝統に対する認識……演出に於ても

狂

言

和泉会特輯号

昭和36年11月1日発行

発行所

名古屋市中区東門前町5ノ2

井上重兵衛方 電話1430

名古屋狂言共同社

印刷所

株式会社 地上社 電話1190

特に今日特異個性というものを要求され、次第に各々のプレー考へにのみとらわれた形が多く、実際に各界に此傾向がみられる中で、伝統芸術の価値が稀薄になつてきたと考へられ、狂言も又時代と共に進化して参りましたもの、今日的に物事を処理する人達の間には伝統というものを考へ方には随分と異つた解釈がなされ、これからの伝統芸術を維持していくことに非常な難しさが感じられます。

名古屋の狂言の今昔

歌村彦四郎

明治の中期から末期にかけて名古屋の狂言界は多士齊々でありました。亡父初代井上菊次郎は晩年東京に移住して活躍、天覧の光栄に浴し、当時の歌舞伎の名優尾上松助と対照されてその枯淡、洒脱の芸風は東京評論界に絶賛を博しました。

当時名古屋には現河村丘造氏亡父河村健三郎氏、伊勢門水氏等が敵として存在して、一線現役として河村保之助、井上鉄次郎、井上新三郎に現在の共同社の連中が五番立ての能に狂言四

番乃至三番を上演、和泉も充分にして至極のんびりとたのしんで来たものであります。

さて戦後に至り能、謡は思はぬ発展を見各流、各派にてそれぞれ大きな権しが出来たようになったのは誠に喜ばしい次第であります。このせちがらひ、気ぜわしい世の中に一つの静寂を求め、あつても知れませぬ。

たゞし狂言を振り返つて見ますと誠に寒心にたえないものがあります。狂言は相手がいる加減か言葉づかひがむづかしいのか志望する人がなく、現在限られた人によつて演じられております。いろいろの原因があること、私共の熱意が足りないことも認めます、が何とかして折角伝つて来た名古屋の狂言を後世へも伝へたいものであります。

その一端として今回の名古屋和泉会を結成して同好の方々の御後援を願う次第であります。

十一月の催能

三、霞会囃子会

一、二、鳳鳴会

一、八、名古屋和泉会第一回公演

一、九、名古屋観世会

一、九、名古屋観世会

一、九、名古屋観世会

一、九、名古屋観世会

一、九、名古屋観世会

一、九、名古屋観世会

一、九、名古屋観世会

清水座頭 和泉保之
井上松次郎

二、三、掬水会

熊野 植村真太郎
谷野 博

二、六、清風社謡会

三、宝生会定式能

一、〇、藤門会三〇〇回記念

清 高木美知子
森田 正子

二、三、掬水会

二、六、清風社謡会

三、宝生会定式能

一、〇、藤門会三〇〇回記念

二、三、掬水会

二、六、清風社謡会

三、宝生会定式能

一、〇、藤門会三〇〇回記念

二、三、掬水会

二、六、清風社謡会

三、宝生会定式能

一、〇、藤門会三〇〇回記念

二、三、掬水会

二、六、清風社謡会

三、宝生会定式能

狂言の解説

歌村彦四郎

栗 焼(くりやき)

丹波から送られた栗を焼くように言いつけられた太郎冠者、苦心して焼いた栗のうまさうな匂ひにたまらず、一つ食い二つ食いするうち四十の栗をみなたべてしまいました。その申訳は例によつて舞となります。

清水座頭(きよみずざとう)

清水の観世音に願かけする「座頭」と「ござ」が出合い、互に目の見えぬことを知るまでのおかしみ、ついにはいたはり合つて芽出度く夫婦になりました。あまり当地では見ぬ狂言です。

蜘蛛人(くもぬすびと)

連歌ずきの好人物、連歌の当番に貧しく用意が出来ず、有徳な人の処へ忍び入つたが、主人に見とがめられ逃げこんだところが蜘蛛の巣の中、この主人

も連歌ずきのところから、夜中酒もりなどしてみやげをもたせてかへしま

す。
墨 塗 (すみぬり)

訴訟のため在京中、馴染となつた女に帰国すると告げに来て、女に泣きつかれた大名は情にほだされて共に泣きます。女の涙が「びん水入れ」の水をつけるのを見つけた太郎冠者が、水と墨と取替へました。さてさめざめと泣いた顔は……大名もびつくりして逃げ出します。

名古屋和泉会の

公演にあたって

野村 広二

第一回の公演が十一月十八日に開かれる。秋の朗報です。まことによろこばしい。

狂言の会といえは、まづ東京では白木屋狂言会、大阪は三越の会、名古屋の朝日狂言会、これに和泉、大蔵二流の大会を加えて、それぞれみものである。今度の和泉会ができて、名古屋では、やるまい会と三つの狂言の会をもつことになる。これは毎年期待される春秋二回の名匠鑑賞能に、今は朝日能が休会なので、中日能の三回の犬能にくらべることもできよう。そしてこの三つの能のうち一回は宝生の顔ぶれなので、この和泉会も、ちよとどそれに当るような気がしないでもない、けれどもちがつては、

この会の趣旨は、青年家元和泉保之君を後援し、和泉流が実に永い間その技芸と盛名を代々の家元とともに伝承し、今も立派な郷土の古典芸能となっている姿を一段と輝かしくしようというのである。大きく、ゆかしい理想で

ある。

家元保之君は、弟の三宅右近とともに、野村万之丞、万作のやはり兄弟とくつわを並べ、いや先頭に立つて、将来の狂言界を、大蔵の若手とともに、荷つていく好青年である。保之は同年のシテやハヤシの若者たちと「五人の会」をつくり、青年の芸術意欲とけいこのみゆりを発表し、ファンや、好意あつて口うるさき人々にすんでみてもらつてゐる。その芸はのびのびと、器大きく、ふくらみあつて明るい。その明るさは天までとどくようだ。その保之は、ひきしまつたものをもつ万作とおなじく好ましい。だが、芸道にきびしくうちこまなくてはならない。春秋を未来にもつ保之の狂言の句い、道を進むにどこかの庭からする花の匂いのように、そこを通りすぎればなくなつてしまふものであつてはいけない。またしつこくてもいけな

い。かつて故兼資には人間を、先代巖には芸術をかんずるとかいたことがあるが、大蔵で茂山弥五郎翁の子たち、喜三、幸四郎には人間を、そして保之君からは芸術をくみとるようになるであらう。そうなつてほしいものである。この会であうんと活躍してもらいたい。またできるやうにしていただきたい。

次に名古屋の和泉流。過去にはなやかな歴史をもつものには、大きくのびようとする苦ももまた大きいであろう。名古屋の特筆される古典芸能には舞楽、平曲、能、狂言、江戸邦楽の一、二の部門とおどりがあげられる。その中には、古典をうちくたき、モダンな味をもとめ、脱皮に骨身をけづるグループもある。しかし一中節をききたい、地唄舞をみようとしても、今で

はラジオかテレビに頼るしかない。何も芸能全体を名古屋におくつもりはないが、他方、山田流の筆曲も、寅派の歌沢も、そして地唄舞も、年に何回かの会がそれを補つてくれる。東西の流通がおこなわれ、愛好家をよろこばせている。能も狂言もそうである。狂言の三つの会がそうである。中日能の新作狂言発表も興味深い。和泉、大蔵二流を一堂にあつめるのも、新作紹介の会も佳い。しかしそれ以上に、和泉流一流の狂言を舞台でみせるのには深い意義がある。保之君の後援と、ねらいは二つのようである。一つである。その中から後継者の養成、能の狂言、独立した狂言の立場というむづかしい問題を解決する足がかりもつくられよう。狂言のよさも徐々にではあるがえりみられよう。狂言共同社もつよくなる。そして狂言という古典芸能を保持していく方途も生れよう。自問自答、自分自身の問題と、まづしなくてはなるまい。その成果は、たとえば句はぬ金不せいでだめ、高価でも数日しかもたない切り花のよさよりも、むしろ、秋涼とともに蕾をもち、やがては紅い、可愛い花を青い葉の間につける寒椿のように、永く咲きつづけなくてはなるまい。

第一回から名古屋市民芸術祭参加でおこなわれる由。いろいろの方にみていただきたい。江戸時代の勸進能の絵のような光景も想像したいし、笑いたいときは、大きく笑おう。しゆくとして声のない場面もあるにちがいない。当日はのびのびとした気持で狂言の一日を過したいものです。

石田特許事務所

士 理 士
法 学 法

石 田

名古屋市昭和区都島町 2 の 10 TEL (88) 1330

業平の藝能

— 狂言『業平餅』 —
の上演に寄せて —

服部 幸雄

名古屋に発足した和泉会が、第一回の公演会を持たれることになつたのは誠に喜ばしい。そのレパートリーを見ると、珍らしく『業平餅』が演じられるようだ。しかも、尾州徳川家蔵の装束を用いられるとのこと、おそらく素晴らしい舞台になるであろうと期待される。

この上演に寄せて、私が日頃考えている問題のひとつを記して、諸賢の参考に供したいとおもう。

業平、即ち在五中将在原業平は、周知のごとく六歌仙のひとつとして、和歌に優れた美男子であつたとされる。ところがこの業平という人、和歌の道だけでなく、芸能史の上にも特殊な位置を占めており、早くからその流れをかたちづくつていたように思われる。

業平東下りの事蹟を歌物語の形式にまとめたとされる『伊勢物語』そのものが、既に伊勢の國に語り伝えられた古伝承を中心として在原の翁の語つた翁舞の詞章から発し、在字の中將と呼ばれた巫祝によつて諸國に伝播され、更に業平と結びついて成立したのだとする説(高崎正秀氏他)さえある。なるほど業平東下りという想定は、古い説話群の一類型である貴種流離譚に違ひなく、しかも「加茂の岩本・橋本は業平・実方なり」(徒然草)と上加茂神社の摂社の祭神に祀られていることなど考へても、業平が宗教的色彩を残した芸能の世界に特殊な形で投影している理由が判るような気がする。ところで、中世の芸能である能に、

業平といは業平の靈が登場するのは二曲残されている。「小塩」と「雲林院」である。このうち、「雲林院」は、源氏物語の世界に混同されて、光源氏と業平との像が奇妙な形で二重写しになつてゐる。さらに、「井筒」には、業平自身は登場しないが、シテの紀有常の女が水鏡に己の姿を業平と見まがう趣向で、事実上舞台には業平が現出するような雰囲気醸成してゐる。また「杜若」における「杜若の精」も実は業平のイメージと考へて差付えないだらう。従つて、この二曲も含めて四曲とみてよからう。それらのうち、業平讃仰に終始する「雲林院」を除く三曲は、いずれも『伊勢物語』の物語を直接の素材として脚色したものであり、ともに業平の像は、「女とも見えず男」の美男子で歌才に秀で、多くの女性に愛された理想的男性像として現れる。これらの中には当然宮廷的貴族世界への憧憬が感じられる。いふなれば、中世の人々のイメージにある業平は、こうした教養ある貴公子なのであつた。一部には、在原寺など、業平を神とあがめる信仰さえ行われていたかも知れないのである。

中世人のそうした業平像を一方に想起しておいて、さて狂言の『業平餅』を見ると、甚だ面白い。餅を食べたくても代金のない業平、こつそり餅を食べる作品群、鬼や閻魔大王が無邪気で弱い存在として拵らえられてゐる作品群、また妻に散々いためつけられる弱い夫を出した作品群、これらが狂言の「笑い」を生み出すためのひとつの類型であつて、「倒餅(相成)」と呼んでいいならば、この曲の業平も明らかにその系列に含まれよう。ただここで私が注意したいのは、「業平」という個有名詞である。狂言において倒餅させられる人物が、個有名詞で出てくる例が他にいくつもあろうか。要するに、「このあたりの大名」「山伏」「出家」「鬼」「雷」「閻魔大王」などと同一扱いで「業平」が出てくるわけである。「右近」「左近」「太郎」「平六」などは、むしろ庶民側のどこにでも幾人でも居る代名詞であつて、いまは論外とする。「閻魔大王」と「業平」とが同じ扱いを受けてゐる事実は、非常に面白いとおもう。「業平」ということは、既に民衆の頭の中には個人の名としてよりも、もつと漠然としたひとつの抽象的な概念となつて存在したことを示すものである。裏返していへば、業平という歴史上の人物のことは知らないでも、また『伊勢物語』は読んでいなくても、中世の民衆は業平像を各自理想的な姿で抱いていたことを物語るものであろう。従つて、中世においては、あくまでも能に見られるごとく業平が正統であり、その故にこそ異端としての『業平餅』が成立したことを確認しておきたいのである。

ところで、時代が降つて近世に入ると、事情が甚だ變つてくる。中世末期から近世初期にかけて、夥しく生み出された仮名草子の中に、いわゆる擬物語の系列がある。「枕草子」をもじつた「犬枕」「尤之双紙」「徒然草」をもじつた「犬徒然」「吉原つれづれ草」などに混じつて、『伊勢物語』を改変した『仁勢物語』、『吉原伊勢物語』などが普及してゐる。勿論一方に古典が復活してくる時流に乗つたものであるが、こうした古典の権威を破壊失墜せしめて、その夢のような宮廷世界を現実の庶民生活の場へ引きずりおろそうとする読者大衆の欲求、その趨勢があつたに違ひない。これは一つの例であるが、つまり近世的な志向が見られる。ここにおいて、曾て夢まぼろしのように描いてゐた庶民の業平像は變化しはじめる。彼等の概念にある「業平」は、現実生活の場に飄爽として歩く遊野郎に近づく。それはやはり「男かと思へば女、女かと思へば男」のやさ男であつた。彼らは、身近かな歌舞伎の若衆たちに「業平」を感じたのである。

この民衆たちの好尚の變化に乗せて、曾ては異端の「業平」であつた『業平餅』が、装おいても新たに生まれ變つて、今度は正統の「業平」として再登場してゐる。若衆大夫右近源左衛門がそれを以つて聞かえたという「業平」餅を買給ふ所独狂言に舞ふ」といふのは、この曲の新生の姿に他ならぬ。従つて、この兩者の間には明らかに質のちがいが認められる筈であるし、同時に演技、内容も一旦おどりの芸をくぐり抜けたため甚だ變化してゐると思われ。この間の質と様式との變化の具体相を私は考へてゐるのである。とにかく、右近の演じた「業平餅」を買給ふ「独狂言」を考へるのに、安易に狂言『業平餅』を想起することの誤まりはいふまでもない。

(一九六一・一〇・一九)

続 学生と狂言

佐藤 秀雄

当代に及んで学生間に、狂言ブームの聲がおこり、進んで之をとりあげよ

うという意欲的な学生が出て来たのは斯道の為誠に慶賀に耐えない所である。元来狂言は内容的にはすこぶる貧弱な喜劇で、その内容だけでは狂言を軽蔑する学生も出てくる事は間違いない。しかし、こうした特殊な舞台芸術には内容以上の何かがある事を想像して内容のみで狂言を論じない学生が増えて来たのは結構な事であるが、こうした学生でも素人向きでない狂言を初めに見せられると、それだけで狂言に對する興味を失う場合が多くある事は否めない。玄人には興味があつても芸の面白さがわかりにくく、内容的にはがばかしいものが、狂言には少なくない。こうしたものは或程度狂言そのものが見てこそ初めて面白くもなるのだ。

曲目の選び方に慎重な注意を払い、出来るだけ多くの学生に狂言を観賞させ又之に立入る事の容易である事を認識させねばならない。
趣味として又我國の古典に對する愛着の心情から稽古を初めようとする学生に、玄人のための教え方をそのまゝとつて、発声法だの腰のいれ方だのにこだわつて折角の、熱意に水を指すのはどうかと思われる。

順序をふむ事は何事によらず大切ではあるが、之は専門家になるためにこそ缺かせない事である。しかし狂言の普及を第一目的とする場合は、格を破つた便宜方法をとつても敢えて邪道という程の事はあるまい。

先づ興味をつなぎとめ、稽古をつゞけさせる事が必要である。稽古をつゞけて上達して行けば、内容的貧弱な狂言にもほんとうの理解と興味が生れて魅力を感じるようになるのだ。
そうして残つた学生達のうちから次

代をつぎ狂言の伝統を守つて行く若者達が出来てくるのだ。
時代が移り變つてゆく中であつて伝統芸術の持つ価値を守りつゞけて行くのは極めて困難であるが、何としても守り通さねばならぬことである。
然し乍ら盲目的な保守主義は却つてその芸術性を行詰らせ衰亡に導く場合も考えられる。新らしき時代の動向を認識し改革すべきは躊躇なくそうすることは将来の爲必要である。

此時に當つて宗家和泉染之師を名古屋に招き小謡と小舞の会を卒先開催した我々の計画は時宜に適したものと考えられよう。小舞のよきは一般的でないかも知れぬが、これの練習が狂言自体の型を規正し、小謡の本格的練習こそが、狂言のメリハリの完成を助長するものであるといえる。

又十一月十八日に和泉宗家の狂言會に演出される狂言の番他は正に當を得たものと云えるだろう。保之師が学生の薫陶に全力を挙げ、あらゆる好意を示されていることは、今後の斯界の発展を考慮されての事として双手をあげてその卓識を喜ぶものであり、学生諸君の参加を切望するものである。
—一九六一・五・二〇—

狂言 周辺

野村 広二


わたくしの家の小さな庭に花をつけない金木せいがある。秋がきてても匂わない、いろいろとわけがある。

この秋は春よりも、能界はさみしい気がする。しかし時の流れ全体は多彩である。東や名古屋や西の各地をあわせると、話題は相当に多い。
東は、「中世文学事典」(春秋社

、「国文学全集、謡曲・狂言篇」(三省堂)、「歌謡集、能楽論集」(岩波古典文学大系)、「能楽鑑賞事典」(河出新社)などがでた。一と四には書評も出た。外人のものでは、若い比較文学研究家E・マイナーの「西洋文学の日本発見」と「外国人の見た日本、戦後篇」(どちらも筑摩)がある。前著は米英の能研究者パウンドやイエイツと能のことが香気高い訳文で読むことができる。二人の文学者の能における先輩にフェノロサを見出すが、この人に能を教示したのが先代実と、この間追善能をおくられた実で、その頃は竹世といつた。フェノロサが英文学者平田靉木につきそわれ、梅若え足しげく通つたことは「英文学夜話」(研究社、矢野峰人)にくわしく語られてゐる。必読の書である。そして両実の功績は大きい。さて秋になると好物の柿のいろづくのが待たれる。中にはゴマが多くて、これはうまそうだと口に入れると、味のないものに出くわす。おやおやとおもう。その次に、その次の年にはもう手にとりにくくなる。六平太翁や弥五郎翁がいづまでもした生まれ、愛敬をよせられるのは、その味のゆえではないか。味と人から、いやそこには多種多様な何かを感じさせるものが伝つてき、みるものも入つていく。その高まりのない、味も素つ気もない狂言や能は同好の会でこそよけれ、ほめた芸ではない。何とまたその多いことか。能舞台は器用と不安を味わせるところではない。匂いのない金木せいではないけない。
今年もあと二た月、多くの話題と問題が、新年をかざり、また新年にもちこされることであらう。

何と云つても

お茶は升半



創業天保十二年
升半茶店
名古屋・白馬町